家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十一巻　第三号

3

日本幼稚園協会

昭和四十七年三月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八三号　幼児の教育　第七十一巻　第三号

《好評新刊》

幼児教育界をリードする新書判シリーズ!!

フレーベル新書

1 リナはどうやって文字を覚えたか

フリードリヒ・W・フレーベル著
荘司雅子訳　　定価 330円

2 保育者への一つの指針

平井信義・乾　孝・金沢嘉市・城戸幡太郎
八杉龍一＝著　　定価 360円

3 対談・しごとと生きがい

私の出会った15人
多湖　輝　　定価 360円

4 楽しい遊び〈室内・園庭編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎＝著　　定価 300円

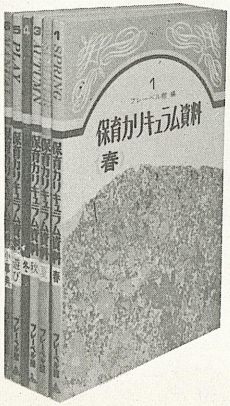
5 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎＝著　　定価 300円

6 楽しい遊び〈園外編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎＝著　　定価 300円

●以下続刊



保育カリキュラム資料

〈全6巻〉

1…春　2…夏　3…秋
4…冬　5…遊び　6…小事典

B5判　136頁　各巻600円（送料 110円）

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずされることもしばしばです。
そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

株式会社 フレーベル館

幼児の教育

第七十一巻　　第三号

幼児の教育　目次

――第七十一巻　三月号――

表紙　園房江
カット　斎藤信也

倉橋惣三選集より……（4）
幼児の教育の条件……牛島義友…（5）
★講演　幼児教育の課題……田口恒夫…（9）
おくることば……周郷博…（28）
三月に思う……堀合文子…（30）
★ユートピア……清水さよ子…（34）

幼稚園のおひなまつり……片岡霊恵…(36)

書評……土屋とく…(42)

幼稚園にのぞむこと……牧田和子…(44)
—すばらしい人間としての幼児をみつけよう—

私の体験したアメリカの幼児教育……江波諄子…(53)

保育者養成の諸問題……立川多恵子…(66)

春が来る

窓を開け。窓を開け。汚れたガスを出すためばかりでなく、暖い日光と、軟い空気と、かぐわしい花の香と、にぎやかな小鳥の歌とを迎え入れるために。そして春を幼稚園一ぱいに漲らせるために。

○

黒い重いストーブは取片づけられた。序に冬らしい一切の名残りを取除けよ。壁を払え、床を洗え、額の絵も取りかえよ。隈棚の装飾も取りかえよ。そして、春を春らしく迎えることを忘れるな。

○

春が来る。どこから来る。垣根を越えてブランコの上からも来る。籬に沿って草からも来る。砂場の砂の日影からも来る。子供たちをしてこの春を迎えしめよ。この春に親しましめよ。遊園へ遊園へ春の遊園へ。

（倉橋惣三選集　第二巻より）

幼児の教育の条件

牛島義友

幼児教育に関する意見をと問われると私の考えは以前と変わっていないので、つい同じことのくり返しになって恐縮であるが、いくつかの論点にまとめて述べたい。

1　家庭教育の立場から　中教審の答申においても、家庭教育の重要さを述べていることはありがたい。しかしこれは言葉の上の尊重であって、実際の教育施策の方向は軽視の方にすすんでいるようで、気になって仕方がない。

元来学校教育は家庭教育を補完するものであり、特に幼児教育は家庭教育を中心として行なわれるのが望ましいと考えている。このためには家庭に教育の権利と義務を与え、家庭教育の場をできるだけ尊重することが必要である。家庭から早く切りはなして学校で教育するということは、それだけ家庭教育の場を縮少することになる。もし家庭教育が十分に行なわれる条件にあるならば、よい養育者がおり、安全で文化的な場所があり、また遊び友だちにも恵まれているならば、家庭の中だけで幼児時代を送ってもよいし、否その方がよい。ただ今日はこれらの条件が悪くなり、社会性をつけるためには幼稚園の集団生活でおぎなう。また保育に欠ける場合には保育所で保育することも必要となってくる。しかしあくまで家庭教育が主となるべきものである。

ところが、この考え方が日本ではなかなか確立されない。不完全な、未経験な親が育てるよりも、専門の施設で育てる方がよいと思ったり、家庭で教育することは教育と思わず、学校教育のみが教育であると思いこんでいる人も少なくない。早くから学校教育を開始しなければ立ちおくれる、というふうな考えでもあるとすれば、まずこの点が是正され、親たちに家庭教育の課題と自信をつけさすことが第一ではなかろうか。アメリカでも幼児の早期教育のために Head Start の政策がとられているというが、これは主として、家庭教育や教育環境に恵まれない disadvantaged children のための施策であってすべての子どもに一様に幼児学校教育を開始せよというのではない。

2　幼児の発育がよくなったか　最近の幼児の発育は以前

よりもはるかによくなり、五歳児から学校教育を始めることも可能であるといった意見がこの度の教育改策の根拠の一つであるならば、この点はもっと正確に調べられねばならない。いつの時代においても「このごろの子どもは昔よりすすんでいる」との印象を与えるが、これは共通の錯覚現象である。今日の日本の子どもは、どれだけ以前の子どもと変わっているであろうか。乳児期の栄養指導は大きく変化し、からだも大きいし、歩き始めるのも二ヵ月ぐらい早くなったようである。その後の身長体重の発育はたしかに戦前のものにくらべてよくなっている。しかし体力となると戦時中の幼児と同じ体力検査を行なってみると、二十五メートル疾走とか、立ち幅とびなどで約一歳分おくれている。

すなわち栄養がよいのでふとってはきたが、運動不足（遊び場の不足が原因）でかえって体力は劣っている。知能の発達に関しても、たとえば愛育研究所では毎年二千五百人以上の幼児の知能検査を、戦前につくられた乳幼児検査や、鈴木ビネー検査で行なっているが、戦前の標準を変える必要はおこっていないし、昭和三十七年以後の、平均知能指数をみても、ほとんど毎年同じ価であり、上昇の傾向は見られず、最近は低下の現象が現われている。あるいは日本保育学会が昭和二十九年度に全国幼児の精神発達や運動機能、社会性について全国的調査を行ない、十五年後の四十四年に同じ方法で調査を行なったが、この間発達の向上は見られず、むしろ多くの点において十五年前より悪い結果を示している。これが我々がもっている幼児の発育に関する科学的知見である。

したがって最近の子どもの発育がよくなっているとするのは誤まりであって、むしろいろいろと困った発育阻害現象が現われているのが実情である、特に都会における幼児の生活は安全な遊び場はほとんどなくなり、家の中にこもりがちであり、特に高層住宅の上の方にでも生活していると、一日中いくらも戸外に出ることはないし、よい住宅ほどエアコンディションで、密室内での生活となり、太陽、空気、土などの自然から遮断され、その代りに、テレビを通して強烈な感覚的刺激だけをうける。これはあくまで受け身の刺激であって learing by doing とはおよそ正反対の姿である。これでは体だけふとってくるのは当然であろう。この事態を、いかに解決するかがむしろ幼児教育の今日の課題である。広い運動場と仲間を与えるための幼稚園が必要であるというのは分かる。また自然をとり戻すために幼児たちをつれてキャンプをするというようなものは大変結構である。しかし幼児だけをつれて数日間のキャンプをするとなると、教師の人手や費用を考えるととても大変なことであり、学校側としてできることではない。それよりも、親と一緒に自

然生活を取戻すような厚生計画などの方が適していよう。今日の幼児の生活環境を改善することは早急の仕事ではあるが、学校教育とは別問題である。

3　遊びの生活を尊重せよ　幼児の遊びの生活はもっとも自然な姿であり、そこには子どもの活力と休養、探求心と反覆練習、精神の緊張と弛緩が調和された状態である。この自然の姿が最高のものとは思わないし、能率的とも思われない。幼児の発達にもっと効果的な刺激を加える方法もあるはずである。しかし今日の児童心理学や幼児教育学の知識や技術は、すべて科学的に計画し遂行しても安全であるといえるほど発達していない。自然の親子関係を切って完備した乳児院で育ててもかえってホスピタリズムになる危険が多い。一部の才能の強化訓練は性格や適応性を害するという危険性も考えられる。今日進歩した自然科学においてすら多くの公害を生み出して、その功罪が問われている。自然の破壊よりもっと恐ろしい人間性の破壊がおこる危険性もある。安全性からいえば子どもたちは自然に育てるのが一番よいといえる。新しい科学的工夫を加えるには、その先導的試行は十分慎重にかつ厳密に行なわれねばならない。思いつきの早教育などをやるべきではない。

また幼児の遊びの生活は創造性の芽を養い、大きくたくましく成長するために必要なる肥料のようなものである。子どもが遊ぶのと老人が遊ぶのとは意味がちがう。今日人の寿命は恐ろしく延長し、一生を通して、働かなくともよい時期、（働きたくとも仕事のない時期を含めて）が非常に長くなった。とすれば幼少時に十分遊ばした方が賢明ではなかろうか。早く学校にはいり、早く卒業し、就職して五十五歳ぐらいで退職するような生活は改められ、むしろ十分幼年期は遊び楽しみ、学生時代は十分教養をうけてから職業生活にはいり、七十歳ぐらいまでは仕事についていられる方がよいのではなかろうか。何も急いで学校に入れる必要はなかろう。

4　財政問題　親が子どもの教育のために教育費を出すことは結構なことである。また親としてはできるならいくらでも子どもの教育のために出してやりたいものである。娘の結婚費用に莫大なお金をかけるよりは教育に投資した方がよい。しかしこの親が直接教育費を支払わないで、税金の形を通してまかなうことには簡単に同意できない。税金の形をとれば富の補配分の効果はあるが、媒介としての官僚機構に権力が発生するし、またむだも多い。このような機構は小さいほど人々の自由は大きいわけである。

幼稚園を義務制にすれば保育料が安くなると単純に喜ぶのはまちがっている。今の教育費よりもっと多額の費用を税金の形で使うことになる。この場合、学校教育がどうしても不可欠の

ものであればやむをえない。たとえば高等学校の教育を家庭でやれといっても不可能である。専門の教師を揃える点からいってもまた生徒たちの心構えからいっても、この時期においては学校教育が圧倒的な比重を占め、家庭教育はその学校教育の緊張を休めることくらいにしか役立たない。しかし四、五歳の幼児に対してはその知識教育は家庭においても十分行なうことができるし、また時間的にいっても幼稚園教育の時間は短時間であって大部分は家庭での時間となっている。したがって幼稚園一年間の学校教育の効果と、高校一年間の効果とはかなりの相違があろう。このようないい方をすると幼児教育者から叱られるかもしれないが、ここでは学習効果の絶対的分量だけを取り上げて比べた訳である。

他方日本の母親たちは、子どもの教育に熱心である。世界中でこれほど子どもの教育に熱心な親はないといえよう。しかしこの教育熱心とは学校教育への熱意であり、よい幼稚園に入れ、音楽教室に通わせて、よい家庭教師をつけるということに異常に熱心である。その割に自分で子どもの教育をしようとはしない。否、我流の教育をしてはいけないと思っているらしい。家庭で文字などを教えてはいけないとか、音楽を教えるにしても母親が教えたのではかえって不正確な音感にしてしまいはしないかと恐れている。これはおかしなことであって、親が子どもを教育するのは当然の義務であり権利である。また生活にとって一番基礎となる身辺生活の自立は親がしつけたものであり、また知的発達の基礎となる言語の習得も、母親や祖母たちが家庭にあって熱心に教えたもので、なにも幼稚園に行って習うわけではない。さらに今日の母親たちは以前よりも子どもの教育者としてはよい条件をそなえている。家事は合理化されて余裕ができ、子どもの数は少ないので濃厚な指導ができる（過保護の弊害さえあるが）。また母親自身の教育程度も非常に高くなってきた。この母親に子どもの教師の役がつとまらないはずがない。ただ彼女は教えてはいけないという束縛を自分の心に加えているだけである。ゆえにこの束縛を取り去り、積極的に自分の子どもの教育をするように方向づけ、勇気づけ、自信をつけさせるならば、非常によい教師が子どものそばにおることとなる。しかもこの教師には俸給を払う必要はない。すなわち母親たちを教育の場に動員し、その教育を尊重し、勇気づけるならば、それだけで完全なよい幼児教育ができるはずである。すなわちこれは税金を一つも使わずに幼児教育の効果をあげる方法でもある。国は、このようなよい教師（母親）を得られない子どもに対する教育だけを配慮したらよい。母親という有能な教育的人的資源を考えないのはなぜであろうか。

◇講演◇

幼児教育の課題

田口恒夫

幼児教育のことをまともに勉強したことがないので、それだからまた、いい気になって何でもいえるということがあるのでしょうが、だいたい、いつもいろいろと強烈に感じていることがありまして、幼児教育関係の人がいるから何かいいたいことをいえといわれると、夢中になって何かいっているうちにすぐ時間がきて、結局何をいっているかわからないというようなことにいつもなるので、今日はなるべくそうならないように気をつけます。

〈肢体不自由児〉

私はもともと、整形外科の医者でした。あるとき、肢体不自由児施設という所に行かされました。手足の悪い子どもを親から離して収容し、そこで足が悪い子には手術をしたり、歩行具をつけたり、松葉杖で歩くけいこをさせたりするのです。

最初気持ち悪いと思っていましたが、つきあっているうちに、その子たちもふつうの子どもだということがだんだんわかってくるんですね。それはふしぎなもので、みなさんは、経験がないから信じられないでしょうが、つきあってみると実にいい奴で、一生懸命、先生のスリッパが破れているのを気にしてくれたりするような……ね。ごくふつうの、あたりまえの子どもな

んだなって思うと、だんだんこわくなくなる、気持ち悪くなくなるということはあります。別に、子どもが好きとか、慈悲心があるとか、もともと宗教心があるとかは全然関係ありません。ただ子どもと一緒にいればすぐ慣れてわかってきます。

〈言語障害児〉

そうしているうちにある時、そこの所長さんに呼ばれて、『物がしゃべれない子どもがたくさんいるけど、そういう子どもたちをどうしたらいいのか、アメリカなんかでいいことしてるらしいから、見てきなさい』といわれ見にいったところが、アメリカでは言葉のしゃべれない子どもの問題を相当大がかりにとりあげていて、学校とか幼稚園とか、相談所とか病院とか、どこにも言葉がうまくしゃべれない子どもの専門家がいて世話をしている。しかもそのための専攻課程が、今からもう二十年くらい前ですが、当時、アメリカの百ぐらいの大学にあって、言語病理学専攻課程という特別のコースを、年々、何百人という人が卒業してきて勤める。それは医者のやることではないんです。行ってみて初めてわかって、『何だこれは、えらいことじゃないか』ということで、帰ってから本を調べたりしているうちに、だんだんおもしろくなってきて、とうとう整形外科をやめて、そっちの方が専門になったりしたのです。

〈ろうあ者〉

そのうちに、厚生省が聾唖者指導所というのを作って、そこで、言語のことを担当する人がいないからきてくれないか、ということになり、そこに五年ぐらいいました。

初めて聾唖者というのに出会って、そこでまた、いろいろ経験しました。

そんなことをしましたので、その当時の、整形外科的な病気をもってる人が、どんな目にあわされていたかは、身をもって感じましたから少しわかります。それから、肢体不自由児問題は、整肢療護園で、聾唖者のことも少しわかり、言語障害のことがわかります。

〈幼児とのかかわり〉

言語障害の勉強をしていると、言葉がしゃべれないという理由で、ありとあらゆるタイプの人が来ます、その中には相当の数、精神薄弱というのがいますし、自閉症とよばれる、いろいろ変わった者もいますし、そういう子どもたちの世話をしてきて、そういう子どもとつきあって接するという面から、わかる

ことはわかってきます。すると、どこかに「幼児教育」というのに何となく接してくるんです。

『ああ、この子、もし幼稚園にはいれればなあ』と思って、一緒に幼稚園に話しにいったりすると、バサッと断わられるということを体験するんです。

こっちはいいと思って頼んでいるのに、むこうはよくないといって『やるのは私だから、いくら先生がいいといってもダメです。私が一番よくわかっているんですから』といわれて、まア仕方がないと思って、あきらめることもあるんですが……。もう一つ不愉快なのは『この子がはいってくると他の健全な子どもの、のびるべきものに手をかけてのばしてやれる手がとられるから』、他の子どもの成長がこの子のために阻害されるという……。その上にもう一つあるんですが『そういうことをして、この子どもをしいてうけ入れると、他の健全な子どものお母さんが、ああいうおかしな子どもを入れる幼稚園に、自分の子どもは入れたくないという気持をおもちになると、PTAなどでうるさいのでダメだ』と、それで結局ダメでダメでダメだからダメだ、という訳ですね。

おもしろいことに、全然そんなこと知らずに、最初、入園テストで先生がうっかりして、その子を入れちゃった、という場合にはいいんです。

うけ入れる側は、一たびうけ入れて〝ウチの子〟になると、おかしいけどいいとこもあるということがわかる。

こういうことが幼児教育と、私どもの仕事の接点のおもなものですね。ですから、いい印象なんてもっていませんよ、幼児教育というのは、箸にも棒にもかからないものだと、いつも思っていますし、それよりもっとひどいのが学校だと思っています。

皆さんは、そういう子どもたちの世話が職業じゃないんですが、それぞれの子どもの原点にたちかえって考えなおしてみる時には、そういう子どものことを考えることも参考になると思います。

〈今までの対策〉

そういう子どもたちに何がされてきたかといいますと、今申しあげました整形外科的な病気に関しては、たとえば、股関節脱臼というのがありますが、昔は「エィやっ」と整復して、こういうふうに固めて、ひどい場合には、半年から一年そのままにしておくんですね。そして、一年ぐらいギブスで固めておきますと、今度はずしても動かなくなってしまうんですね。そし

て、それをなおすのに、少なくとも一年半かかる。一年半かかって、足がこうなっちゃったのが、まっすぐになって歩けるようになるともう大丈夫かといいますと、そのうちの約八〇パーセントが、あんまりギューとおさえつけておいたので、骨の頭の一部が死んじゃって、あと一生痛かったり、まがらなかったりして不自由を重ね、おとなになってから神経痛がおこる。トラブルがおこらないという人は、ほんの一、二割しかいない。何でそうなったかといいますと、医者が治療したからです。

治療をしないで放っておくとどうなるかといいますと、ただ頭が上がったりひっこんだりするだけで、あとはあまり不自由ないんです。ところが医者が治療すると一生苦しい思いをする人が、治療した人の半分以上いたということは昔からわかっていたけど、やはり、それがいいような気がしてやってきたのを、ごく最近になって〝治療っていったい何だろう〟と考えなおしてみたら、そんなことをしないで、もっとまともな方法があるんじゃないか、子どもにも痛い目にあわせないで、親も苦労しないで、しかも股関節が直ってくるようになれば……というので、近ごろは、大変うまい方法が開発されて、今は全くギブスをまきません。ただ、子どもの足を首からつるような状態にして、自由に動きまわることによって、足を動かすことによって、股関節がよりよくできるような状態にするのに、ほんのちょっとした手だけ加えれば、子どもが成長する力によって股関節がなおってくるという画期的な治療法が開発されて、これから先はもうギブスをまかれなくなりました。

そういうふうに、整形外科技術は、医者の思いつく範囲では、非常にゆっくりではありますが改革されています。

〈肢体不自由児施設〉

そもそも、肢体不自由児という名前は、手足がふつうの子どもの機能と著しくちがっていることを総称してこういうのですが、その大部分は、脳性まひという子どもたちなのです。脳性まひの子どもたちを社会がどう遇してきたかという過程をふりかえってみますと、昔は放っておいたんです。だいたいは、お母さんが一生懸命世話しても、三つになっても四つになっても歩かないし、物もいわないし、どうもあんまり立派な社会人として社会にたっていけそうにないので、なるべく近所に知らせないように隠そう、隠そうとしてきた訳です。隠そうというのがおもな処遇のしかただったでしょう。

それがだんだん隠してばかりいないで、その子たちにも手を加えてやると、ずいぶん不自由な手がよくなる面があるという

ことが宣伝された時期がありますね。それがだいたい、大正の終わりから昭和の初めころでしょう。その結果、どうなったかといいますと、肢体不自由児施設という、そういう子どもを収容するところを作って、そこで治療とか訓練とか、できる範囲で保育とか、教育ということも、そこで行なえるというような施設を作るべきだという動きがあって、児童福祉法ができた時には、肢体不自由児施設という名前ができて、そういうものを各都道府県に作らなければいけないという形で法律ができて、今まで日の目をみなかった子どもたちが、施設にはいれて、手術をうけられるし、訓練もうけられるし、場合によっては保育者もついてるし学校教育の対象にさえしてもらえるということになった。

〈施設と子ども〉

それをきいてみんな喜んだ訳です。一番喜んだのは親ですよね。それからそういう仕事をしたいと思っていた、ごく少数ですが整形外科の医者たちが喜んだし、厚生省のその当時の局長とか課長とかは、そういうものを作ったことが自分たちの業績になりますから大変に喜んだし、新聞とか、ラジオ、いわゆる報道関係者は『明かるい世の中になったことは結構だ』と喜んだ。それから、地域婦人会も喜んだ、不賛成なんていない、全部賛成です。

その時、おそらく最も大きく不賛成だったかもしれない人は、子どもだったんですが、子どもというのは幸い何もいいませんから、どんなにひどい目にあっても皆が喜んでいれば我慢してますね。幼稚園の子どもだってみんなそうで、子どもは『われわれの人権が正当に保障されていない疑いがある』なんてことは決していいませんから、公害の水銀飲んで死んじゃった人とか、幼稚園の子どもとか、肢体不自由児とか、盲とか、聾とか、みんなそうで、自分のことをいわない性質の人たちです。いう人が全部賛成だったら絶対多数で可決されますね、そういうふうに、可決されて、肢体不自由児施設ができた訳です。

〈施設の悩み〉

法律できめられたらパッと全国でそういう子どもが集められて……その前に、まず敷地が決まって建物が先にできるんですね。次に園長が決まる訳です。そして園長のお気に入りの職員が集まって職員会議をして、その結果、どういう種類の子どもをとったらいいかという子どものわくをその人たちが決める。そして、たくさん応募してくる子どもの中で、一番入れてもら

いたい子どもは、職員のお気に召さなくてダメ、中ぐらいで、本当ははいらなくてもいいような子どもだけがはいってくる。それでもはいってきた子どもは、肢体不自由とか、びっことか、かたわとか思えないほど、ワアワア、キャアキャアやってるんですね。だから子どもだけ見て『うちの園はやっぱり意義がある』なんていうんですよ、幼稚園もきっとそうだと思いますが、子どもなんておとなさえいなければ、みんな楽しそうにしているもんですよ。それを『自分たちおとなが建物を作ってやったから、楽しそうにやっている』と思ったりいったりしても、子どもは『そうじゃないんだよ。おれたちは子どもだから楽しそうにやっているんだ』なんていいませんからね。みんな施設の業績になって、大変はやって、肢体不自由児施設がいっぱいできちゃった。もう施設にはいる人がいないくらいたくさんできたんです。

どうしてはいる人がいないかといいますと、職員に都合のいい子どもをとろうとするでしょ、そういう子どもは、必ずしもそういう所へはいらなくても、必要なサービスがうけられるようになりつつあるんです、一方で。

〈通園センター〉

これは進歩だと思いますが、幼稚園に行くのと同じように通園センターといって家から通って、しかもマイクロバスで迎えにきて機能訓練をうけたり、そこにも保育者がいて、楽しく保育がうけられて、一日おきにふつうの幼稚園に通っている。よく見ると、昔だったら当然、肢体不自由児施設にはいったくらい、肢体不自由なんだけど、今はふつうの友だちもできて、近所の子と、その子なりにできる役割であそんでもらって楽しくやっているので、『肢体不自由児施設にはいりなさい』とすすめに行っても『いやあ、いいですよ。そんなに遠くまで行かなくても間にあっていますし、訓練はあそこで受けていますし、お医者さんには定期的にみてもらっていますし、今やっと幼稚園にいれてもらって、火、木、土は喜んで行って、連れて帰るのがなかなかむずかしいくらいですから……』という訳です。園がつぶれるなどということは天下国家の一大事ですから、園長以下、何とか、一生懸命子どもを集めようとするのですが、子どもの方が来ない、というふうに、肢体不自由児施設も少しずつ変わってきています。

〈隔離収容〉

収容施設にいる子どもが、どういうことを望んでいるかとい

いますとね、まず、まっ先に家へ帰りたいといいます、中でも、親が面会に来る子どもと、来ない子どもがいると、来ない子どもは、つまらないという意識が非常に強いですね。子どもは、お腹がすいていることが最大の悩みではなくて、家へ帰りたいけど、退園まではあと一年だとか、一年我慢しなくちゃいけないとか、ちょうど、無期徴役よりは少し短かい刑期を、半分終わったから、あと半分つとめれば満期になるんです、といった囚人に会った時とよく似ています。いうことが……、何だか悲壮な感じですよ。

なんでその子がそこにいるかというと、主として、施設の都合と家庭の都合でいるようですね、施設のケースワーカーの人に、『なぜこの子を家に帰さないか、家の近くにも通えるところがあるじゃないか。なぜここへ親からひき離しておかなくちゃいけないのか』といいますと、『この間も、ケース会議で、帰そうかということが出たんですけれども、お母さんのご意見をうかがうと〝もうちょっとおいておいていただけると……。今、私も勤めに出始めたばかりですし、お兄ちゃんが喘息で時々病院に通うので、弟が帰ってくると大変ですから、もうちょっとおいていただけると家としても助かるので……〟ということで』両方とも大変結構なのでおいてあるだけで、子どもは結構でないのにそこにいる訳ですね、そういうことがあるので『こういうことをしていると今に施設そのものが危なくなってくるのではないか、われわれは、こんなことをしていていいのかね』という不安を職員ももっています。

〈ろう児〉

それから、その次の、聾唖者に対してどういう対策があるかといいますと、昔から聾唖者対策のしっかりしたものは、聾学校ですね、これは歴史が古いからご存知だと思いますが、義務教育ですから聾であっても学校へ出さなければいけないと法律で定められていますから、聾学校は大変繁盛して、全国の都道府県に一つ以上あって、聾だということがわかると県立聾学校へはいる、県立は県に一つか二つしかありませんから、学校に行く年になると親から離される訳です。聾というのは、人のいうことはよくわからない、だから、世の中の人がやたらに早く動いちゃって、勝手なことを勝手に決められてどんどん進められて不愉快であるという状況ですから、一生懸命、人の顔つきをみながら、しゃにむにくっついていこうと六年間も努力していると、ふつうの子どもとはパーソナリティが違ってくるんですよね。それは当然だと思います。

そういう子どもは、一番親を必要としている子どもなんです、まだ親から離れたんじゃやっていけないという子どもたちで、いきなり小学校教育をするなんて、子どもの方から考えたら理屈に合わないのですけれども、そういう、一番、親を必要としている子どもが一番早く親から離されて寄宿舎へ入れられる訳ですね。

〈盲児〉

盲児なんかの場合はもっとひどくて、六歳なんて、お母さんが育てていると、一人でお便所にも行けないし、お風呂にもはいれないし、着物も着られないし、食事も一人ではおぼつかないという盲児が多いんですね。この子は、目が見えないからごはんがどこにあるかわからない。だから自分が食べさせてやるより仕方ない、といって、しろうと考えでやっていれば、どうしても、お人形さんの世話をするように育ててしまうことになるんですね。ですから親としては、本当は、『親から離せません。私が世話しないと、この子は生きていけないかもしれない』という不安のある子どもを、盲学校長が迎えに行って、『お宅の子どもは盲だとわかっているから、県立盲学校に入れるからよこせ』という訳ですね。『入れないと義務教育法で親を罰するぞ』というようなもので、親はどうしようもないから『弟の方が今幼稚園にいっていてわりあいしっかりしてるから、こいつを連れてってくれ』なんてね……。それくらい、今の状態からすると親のそばにいなきゃだめだ、というのを真先につれていく訳ですね。

〈精神薄弱児〉

精神薄弱児に対してどういうことをやってきたかというと…親が『うちの子どもはどうも三つになってもおしめがとれないし、近ごろ歩き出したけどまだヨタヨタしているし、あんまり言葉もいわないし、時々奇声を発するし、よそのうちのものとってきちゃうし、こういうのどうなんでしょうね』といっても誰もなにも助けてくれないんですね。近ごろは『助けます』という人が出てきたという点では少し違ってきていますが、それでも六歳になるまでは、なにもしてくれないんです、親が相談に行けば、あちこちで拒否される。幼稚園はダメです、施設に入れるのもダメです、といわれて、格別そういうことの教育を受けていない人が、どうしていいかわからなくて、全責任を負って家庭で保育している。よほどちゃんと勉強した人でも保育がむずかしいかもしれないような子どもは、一番教育のない親

が保育しようという訳です。親なんかいなくたって育つような利口な子どもは、優秀なる保育者が国立幼稚園でご指導申しあげている。現体制はそういうふうにできていますから、誰も世話してくれないでしょう。

『遅れてはいるかもしれないけれど、皆と一緒に遊ぶチャンスだけは与えてもらいたいから学校へ入れてもらいたい』等というと、学校の方で『来ちゃ困る』という訳ですね。『義務教育だから来たんだ』というと、教育委員会の方が困って、『就学猶予願いというのを出してもらえないかね』という訳です。やっと免除願いや、猶予願いに低抗して入れてもらうとどうなるかというと、特殊学級や、養護学級という特殊なものに入れられる訳です。寄宿舎なんかに入れられて、いたずらをしたといっては叱られ、便所をよごしたといっては叱られ……ということをくり返してやっていると、だんだん人柄がおかしくなってくるんですね。それで、おとなになって本当におかしくなると、精神薄弱というのは本当におかしいというんです。

〈今までの特殊教育〉

精神薄弱とか肢体不自由児とかを教育する分野では、特殊教育といっているんです、特殊教育という箱を作ってそこに入れて、今まで行なわれてきた特殊教育というのをやっているんですが『今、やっていることが、おかしいんじゃないか』という人があんまりいないんです。子どもは何にもいいませんからね、新聞社なんかが見にいってもね『いや、ずいぶんひどい子どもに、熱心にやっていますね。辛抱強い人でなきゃできないんでしょう』とか『根気がいりますね』とか『ご苦労さんです』とか、たいがい感心して帰る。たいがいの人は『大変熱心にやっていて頭が下がりました』なんていいますが、よくみると、子どもだけはあんまり感心していないということがとても多いんですね。

特殊教育というのが、もともとなぜできたかというと、たとえば『耳が遠いとか目が悪いとか、知恵がおくれている子どもは教育しなくていいんですよね』というと、非常にあたりさわりがあるんです、だから政府としては『何かしています』ということにしないとおさまりが悪いので、何かしていますということにするために作るんです。

〈学校〉

もともとふつうの子のための学校というものがあるでしょう、これが問題なんです。それは、国民の子どもを国家目的に合わ

せるために政府が作ったもので、非常に国家権力的なものなんですが、みんなそういうことを忘れちゃうんです。自分もそういう学校を出てきているし、自分たち自身は相当まともな人間のような気がしているんです。ああいう学校へ行ったおかげで、私は今、算数も国語もできますし、みんな忘れたけど、地理や社会も歴史も一応習ったと思っているんです。それが今の生活にどれほど役立ってるかわからないような気がしているんです。実際には、まるで役になんかたっていないんですよ。

皆さんのころにはそれでもよかったけれども、今幼児教育をうけている幼児は、二〇〇〇年代になった時、その社会に適応してそこで生きがいがあるくらしをしていかなきゃいけない連中でね。その連中が、今の算数を知っていてどのくらいいいことがあるかというと、あんまりいいことないんです。子どもに何を教えるべきだという専門家ではありませんが、少くとも次のようなことは事実です。今学校で教えられていることの内容の根本は、今から百年前に決められたものです。それをやっていると、おとなになった時、産業人として立派にやっていくのに役にたつ、それに、もう一つは戦争する時の兵隊ですが『右むけ、右』といった時、パッと右向く人は、学校教育をうけてきた人の中に一番多いんです。学校というところは、軍隊に準じていろいろやってますから。外国にせめ滅ぼされるのはたまらないというのと、生産がおいつかなくて、食べ物がなくて、のたれ死にするのは困る、という二つの恐怖心が幽霊のようにいつでもつきまとっていた時代に、今の学校はできたのです。病気と飢餓と、戦争に負けるのは困る、それからのがれるためには全力をふりしぼって国民一致団結して、国家の方針に協力しなくてはいけない。親も子も、おじいさんもおばあさんもそう思っていた時代にできたのが今の学校です。

もともと人間を育てるという思想でできたものじゃないんですね、普通学級っていうものは。国民全体を集めてできるだけ国の方針にあったことを、徹底的に教えこむことが必要な時代だったので、平均的な子どものことを頭において、建物とか設備とかを作る訳で、全国どこへいっても、小学校の子どもの机やいすは小さくて同じにできているんですね。子どもが大きくなっても明治時代とあまり変えないんです。校長先生なんて全然勉強しないのに、あんなに大きな机で、一日八時間勉強する生徒が小さな机で……。私なんか、あんなに一日六時間も勉強したことは、学校卒業以来一度もないですね、一年生とか、二年生の小さい子どもがよく耐えていると思います。学校でやっていること自体が、根本的に反人間的で、非人間的で、おかし

いんじゃないかと思わなくなっちゃうように頭が汚染されているんです。学校を出たからですね。そういう中に、著しく大きな個人差をもった子どもが来ると、来られた方が困っちゃうということがあるんですね。だから拒否したりする。何にもしないでおくのが一番いいけど、何にもしないでおくと、教育は国がするといっておきながら、いかにもそういう、全然、何もしない子がいるではないかという意見があったりするので、しょうがないから、平均から少しはずれた子どもがパラパラいる中の平均的な子どもをつかまえて、聾教育とか、盲教育とか、肢体不自由児教育とか、精神薄弱児教育とかいう、特殊教育諸学級というのができた訳です。これら私どもが世話する子どもが、どういう教育的処遇をうけてきたかという事の流れですよね。ところが、おもしろいことに、そういう子どもたちの教育の中で『これは変だ。そうしなくてもいい、こういうやり方もある』ということが、いろいろ出てきているんです。これから、いくらか希望的なことを申しあげます。

〈考え方の変化〉

まず肢体不自由児に関しては、『肢体不自由児は、肢体が不自由でも、その子を中心に考えると、もっとふつうの子どもと遊ぶ機会が多い方がいいんじゃないか』ということをいう人が、ぼつぼつ出てきた。もう一つ大事なのは、肢体不自由児をやたらに訓練して、少しでも軽くして、歩けない子は歩けるように、立てない子は立てるように、しゃべれない子はしゃべれるようにして、生産社会に適応させる、社会復帰させて社会のお荷物にならないようにしよう、適応させるんだ、リハビリテーションをするんだという考えが強烈にあったのが、少し変わって、今度は何が出てくるかというと、『そういう考えは、おかしかったんではなかろうか』という反省なんです。

前は、もっぱら社会復帰とか、身辺自立とか、経済的自立とか、社会適応とかを、一生懸命そのためにやっているんですというふうにいっていたんですが、少しずつ、人間を大事にしようという考えにたち帰ろうとか、民主主義ってそういうことだったんじゃなかろうか、という考えにたち帰ったところが、社会適応なんていう考えがおかしいんだ、現在の社会、ちょうど普通学級が一つの社会ですが、これに適応させるのが目的ではなくて、その子どもの成長のためになるように、社会や普通学級を変えることも考えなくちゃいけないんじゃないか、ということが、だんだん気付かれ始めてきたんですね。

〈発達保障〉

文部省や、厚生省が、社会復帰とか、経済的、身辺的自立のためには、あらゆる手段を尽しても、ということをだんだんいわなくなってきて、そのかわりにどういう言葉が使われるようになったかといいますと、一つは〝発達を保障しよう〟です。発達を保障するというのはどういうことかというと、その子のもっている成長の可能性があるなら、それを全面的にのびるまでのばしてやろう、どこまでのびたかなどということは、問題にする必要はないし、最大限のびたところで、社会的、経済的自立ができるかどうかを問題にすべきではない。生産社会にどれだけ貢献するかなんていうことによってその人の価値が決まるのではない。むしろ教育というか、保育というのは、その子のもっている能力がどこまで伸びたかだけが問題なんで、伸びた結果が、IQいくつかになったかなんていうことは問題ではない。60なら60でもいいけれども、その人のもっているものが充分のびて60なら、ちょうど120の子どもが120であるのと同じくらい、すばらしいことなんだ、という見方ができなくちゃいけないんじゃないか。そしてむやみに社会に適応させるとか、経済的に自立することが最終目的とかいわなくなった。そして、子ども自身をもう少しよく見て、特定のこの子の場合には、どうしてやったらこの子の成長のためにいいのか、という考えにたってあらためて学校を見直すという動きがでてきて、したがって、肢体不自由児施設がだんだん下火になってきて、一方で通園センターの数がふえてきました。

〈不自由児の保育〉

そこで何をするかというと、ほんのわずかの治療と称する訓練や、お医者さんの診察もありますが、大部分の時間は、保育者がいて、そこで他の子どもとのつきあい方とか、他の子どもとの遊び方とか、自分とちがった種類の子どもとつきあうチャンスを与えている。この、チャンスを与えるというのが、今、通園センターの一番大きな貢献でしょうね。家にいると誰も遊びにきてくれないし、外へはって出ていく力は自分にはないという子どもたちに、他の子どもと共に遊ぶ機会が、初めてそこで与えられる。そこで成長した子どもが、パートタイムでふつうの幼稚園へ、月、水とか月曜だけとか行って、だんだんふつう学校に適応できるようになっていく。そうすると、そういう子どもが、普通学級へはいっていきます。幼稚園で一緒の仲間で通ったんだから、ふつうに一番近い学校へ入れたらいいとい

う人がだんだんふえてきて、校長なんかは、県立の養護学校があるからといってすすめたりするんですが、『うちの子は足が悪いので、一番近い学校がいいんです』というと、もっともなことでしょ、昔は足が悪いと、一番遠くの学校へ行ったんですが、こうして、ふつうの近くの学校へはいる。

〈障害児の入学〉

そこでどういうおもしろいことがおこるかというと、その子と一緒に幼稚園にいっていた子どもが面倒みるんです。先生は、はじめ、そいつのいうことがわからない。先生は『困っちゃったねえ、変なのが来たねえ』と思っていると、他の子が『あのね、あそこへスリッパおいてきたっていっているんだよ』なんていってくれる、『あっそう、じゃとってきなさい』なんて、生徒に教育されて、だんだん先生もわかるようになる、すると職員会議で『あんな変なのを入れたのは誰だ。校長がうっかりしてたんじゃないか、あぶなくてしょうがない。もし事故起こしたら誰の責任か』なんていうのがいると、担任の先生が『だいたい大丈夫そうです。二ヵ月たっていうこともわかるようになりましたし』というように弁護する側にまわるんですね。

鉛筆を落とすといっても、落とせば他の子が拾ってくれる、もうそういう間柄ができていますから、そのために先生や他の子が迷惑するとか、ＰＴＡが何とかいうということが、だんだん通らなくなって、今や乳母車にのって通ってくるのもいる。やってみると結構、何とかうまくいくのが多いんです。近所の子どもが乳母車にのせるところから手伝って、学校までおしてくる。足をひっぱる係とか、もうコツがわかっていて先生なんかよりうまいんですね。結局、地球家族の仲間なんですから。

つきあい方なんていうのは、つきあっていれば、いろいろ出てくるんです。昔は、こういうのは例外だったんですが、だんだん例外じゃなくなって表に出てきました。肢体不自由児という名前を与えられて、特殊児童になっちゃっていた子どもが、必ずしも特殊でなくて、結構、普通学級の中で、その子なりの役割を与えられてやっている。相当変わったのがいて、一緒にいた連中もずいぶん勉強しているんです。その子がいなかったら思いもよらなかったことを、いろいろ学ぶことができて、少なくとも、その子どもたちが将来、市会議員になっても『肢体不自由児は殺しちゃえ。その方が社会のためだ』と誰かがいったら『うん、それはいいかも知れないけど、○○君はダメだよ。あれは僕たちの友だちだから』ということになるでしょう。それが、人間同志のつながりであり、政治に血が通うとかいうことだと

思います。こうして、普通学級に外からはいってくる人がふえてきたんです。肢体不自由児とか難聴とか、聾ですね、全然きこえなくても普通学級にいっている子も結構いるんですよ。

〈ろう児とのつきあい〉

昔だったら、当然聾学校へ行ったくらい、耳が遠くて、ふつうの幼稚園とか小学校へいってうまくやっている子が、それはたくさんいます。うしろから『〇〇ちゃん、お弁当もってきましたか』なんていっても返事しますよね。そうすると先生は、無意識的に、うしろから肩たたいたり、ゼスチャアーをしたりするんです、クラスの連中もみんなそうです。『〇〇君、わかるよ。言葉だけでわかってるよ、じゃ、ウサギにえさやれっていってみようか』なんていって『〇〇君、ウサギのね、ウサギのえさやって』というふうにいいますよね。するとその子は行ってえさをやる。『ね、やったでしょ、ちゃんとわかってるんだよ』そういうもんです。それが人間と人間のつきあいですから、相手がたとえば西洋人であったりしてもそうですね。むこうがわかるようになったんじゃなくて、こっちの接し方が変わるんです。そして何とか通じたい、という気持が先にあるんですね。あって、つきあおうと思ってさがしていると、両方で合うところがすぐ見つかるんですね、その合うところをみつけようとするのが人づきあいでしょう。

耳がきこえたってそうですよ。両方が通じあう道をさがそうと思ってると、どこかあたるでしょ。そうすると、どっちも相手がよくわかると思うようになるんですね、それを、初めに難聴とか、精薄とか名前をつけちゃって、これはダメらしいよなんて思ってると、つながりようがないですよね。そんなこと知らないでつきあってると、その子とつきあう時はこうするといいというような、言葉ではいえないものが、すでにできているんですね。子どもは、先生よりしばしば早いくらい、そういうチャンネルをみつけ出す力があるんですね、そういうふうにして、みんながつきあって、しかもそれぞれの子どもにとって一番のびやすいようにしておいてやる。それが保育の目的にかなっているとすれば、特殊学校や、特殊学級や、施設を作って子どもを分けたりすると、ますますその子たちは、その仲間の子どもとしかつきあえなくなっちゃう。学校というのは、そういう点では、非常におそろしいですね。

〈こころとことば〉

言葉というものは、だいたい気持が先に通じていた時に、は

じめてわかるんです。外国語でもそうです。言葉だけきくと、慣れない人はわからないですね、以心伝心といいますが、気持ちが通じるような心のむきあいとか、つながりがない時には、いったことは通じません。難聴で、相当ひどくても〝あの子が好きで、あの子と○○して遊びたい〟という気持ちが先にあると、その子と遊んでいて、その子が『ダメだよー』なんていったその言葉がパッとわかるようになって非常に早く、言葉の理解ができるようになります。他の子と遊んでいると、理解がのびる訳ですね。

しゃべらない子がいても、その影響をうけて、しゃべる方の子がしゃべらなくなるということはありません。こうして集団の中にいると、子どもにとっては、いろいろな点で得をする。そして、集団で遊ぶことを覚えると、どんなにいじめられても、通じなくても何でも、外へ行く子になるんですね。脳性まひの子どもで、ふつうの学校を卒業した吉田さんという奥さんが『子どもの時、いじめられませんでしたか』という問に答えて、『いじめられても、いじめられても、それよりもっとおもしろいことがあったから、出ていくんですね』ということをいっていましたが、やはり他の子と遊ぶ方がおもしろいでしょう。

〈変わる学校〉

こうして、六歳になって学校へいくようになると『この子は聾学校へ行かなくちゃダメです。90デシベルですからね』なんていう人がだんだんいなくなってくるんですね、聾学校は定員がへってきていますが、今、耳の遠いとわかった子どもの家を家庭訪問する教師をプールするところを、聾学校にするとかいうことを考えています、イギリスなどでも、聾学校の先生は、籍だけは聾学校においておいて、家庭訪問をしたり、普通学級にいって、そこにいる聾児の面倒をおもに見る副担任になったりする動きがでてきています。文部省でも、おそまきながら『今までやってきた特殊教育はどうやらおかしかった。だから、これから特殊児童がいても、なるべく特殊視しないで、特殊学級を作っても、ふつう学級の子どもと一緒に、その地域社会の子どもとして、できることはできるだけ一緒にさせなさい。聾学校が、隣りの学校と運動会を別々にするということをしないで、なるべく共通のプロジェクトに従って、一緒にしなさい』というおふれを出したりしてきています。ですから、そのすじは、ちょっとちがうかもしれないけど、いろいろなところから従来の体制が変わりつつはあるんですね。

〈変らない学校〉

しかし一番くずれないで、一番厳然としていて、一番どうしようもないのが、普通学級です、従来通りの形をそのままとっていますね。そして、子どもがくる前から、やることを決めておいて、一人一人の子どもをよく見て、その子の成長に役立つことをその場で考えていくという姿勢が全然ないですね。幼稚園だって、ところによっては、九時から三時まで、安全にけがさせないように帰すというだけで、ピアノがポンとなったらピンと立って、ポンとなったらおじぎをして…ということができないと人間じゃないように、三歳から徹底的にたたきこんで、子どもが裏山へ逃げたりすると、親をよび出して叱ったりする人がいるという、うわさをきくことがあります。

こうなると、まさに小学校に準ずるようなもので、せっかくすなおにのびそうだった子どもが、幼稚園をいやがり始める。子どもは幼稚園にいくくらいなら死んだ方がいいと思ったりするということはありうるんです。なぜありうるかというと、結局は、その子どもに即して、その子どもの成長をはかって考えるのではなくて、幼稚園や学校の方針に子どもをはめていこうとするからです。それにうまくはまった子はほめて賞を与えてのばし、うまくはまらなかった子は、たたいてでもはめていこうという姿勢があるのです。それが子どもの発達をずいぶん阻害していて、さらに、世の中全体に影響していると思うのですが、世の中の人がそれに気づかなくなってきているということがあるんですね。

〈子どもに即した教育〉

私は、子どもに、言葉を教えることが職業ですけれども、親が子どもに言葉を教えていると、非常にうまく子どもが覚えていくんです。親が子どもに言葉を教える時には、いつでもそのプログラムの主導者は子どもの方で、親は、その場その場で教え方を覚えて教えているということです。

たとえば、子どもがうれしそうにしていると、『ウーンうれしいの』とうれしそうにしているのを見て親がそういうんですね。カリキュラムみたいのは全然なくて、子どもが、病気などできげんが悪ければそのままにしておくし、子どもが『ア、ア、ア』というと、そちらを見て、『ああ、時計あるね、カチカチ』なんていうように、何を教えるべきかということは、だいたいにおいて、子どもが、その時の調子で指定しているんですね。親はその指定を一生懸命察して、子どもが納得するまで、その

ことをせっせといっていくという場面が、意外に多いんです。あれがもし、小学校と同じように、二歳児には何を教えるか、順番としては何がいいか、日本語教育としては、平均、週何時間が適当か、時間帯としては、午前九時から十時の時間帯がよろしい、なんていうきまりがもしあったら、おそらく95％の人は、おとなになっても、日本語をまともにしゃべれなくなってしまう、これは見通しとしては相当はっきりしていると私は思いますね。

そういうことから考えても現在の学校というのは、非常に非人間的にできていて、子どもの成長を保障する機関というふうにはとても考えられない。子どもの発達を保障していくために必要な措置をとれる体制になっているとは、とても思えない。西暦二〇〇〇年代の社会に適応して立派にやっていける、そしてその社会を今のわれわれの社会よりも、もっと地球の上にすんでいる地球家族、地球社会とか、地球上の生物がみな、より生きがいのある、よりよい生活をしていくために、今の子どもたちを、どう育てたらいいかなんてことを考えると、何だか、早く学校だけはつぶしてしまわなければ……という気がしてくるんです。何しろ、あのコースをずっとたどっていくと、休み時間と体育と給食の時間以外は、我慢して、そして中学にはいって三分の二の人にわからないような教科をまたずっと三年やって、高校にはいると、あれよあれよという間に大学の入試で、それにおっこちたら人間でないようにいわれるということを知っていて、やっと大学にはいると十八歳でもう、ガクッとして、何しにきたのかわからない、というのが多いんです。

〈改革の方向〉

だから何とか、今の教科というのもやめて、大幅に変えられないものかと思います。算数の中味を変えよとか、国語なんかよしちゃうとか、そして学年なんていうのはやめて、小学校というのは、いかなきゃならないけど、いつ来てもいいです、というようにして、一年たったら二年なんていうのではなく、勉強の内容そのもの、たとえば、算数なら算数についてだけいうと、興味があって、やりたくて、おもしろいなあと思い出したら、新しく物を習うことくらいおもしろいことはないですからね、夢中になって半日やっていたら、ふつうの学校の一学期分をやってしまったなんていうプログラムが今にできます。一番おもしろい休み時間のあとに、いってみたら数学で、ねむいなあなんて思っていると、微分の第一課が終わっていて、その次にいったら、もうわからなくなって、結局学校で何を習ったか

というと、微分やってもおまえにはわからないということだけおそわったなんて……。誰も、やればおもしろいなんて教えてくれないんです、現に〝やったのにおまえはダメなんだ、だから二度と再びやろうと思わない方がいい〟という強烈な劣等感をうえつけて卒業させるのが学校の最大の特徴です。

何のためにあるんでしょうね、学校というのは。音楽劣等感とか、体育劣等感とか、数学劣等感、国語劣等感、英語劣等感とかを育てるには、非常にいい環境で、まちがいなくそうなるでしょうね、運動会で一番早く走ったやつは、競馬と同じ一番大きな賞品を与え、①と書いた旗に並べ、とか、二番目に走ったやつは、二番目に大きな賞品を、四番以下の人は負け馬だから家へ帰りなさい。というようなことをつい最近までやっていましたが、やたら早く走る子は、努力しなくても何しなくても、いつも早いんです。そういうふうに、できてるんです。ですから、白人は黄色人種より立派で、黒人というのは全然だめ、というのと全く同じ理屈なんです。

勉強でも、通信簿というのがありますが、格別努力しなくても5をとる子はいるんです。ですから、そんなものは全部やめて、学校というのは、その子どものもっているいいものをうんと育てると同時に、他の子どもとのつきあい方とか、ふるまい方だとか大事なことを、せっせとやって、精薄がきても、重症心身障害児がきても、植物みたいな人間がきても、それぞれのいいところを大事にして育てて、それぞれの関係がのびるような関係のつくり方を研究していくとか。それで毎日楽しく、お茶大幼稚園みたいに、それぞれ勝手なことをやっていて、しかもそれがおもしろくて、先生もそれを認めていて、友だちも、それぞれそういうことをやっている、というふうに学校がもしなれたらすばらしいと思うんですが……。

そのためには、たぶん学年とか教科とかおかしなことは、みなやめていかなければいけないでしょうし、通信簿もなくなるでしょうし、むやみにしつけをすることをやめるとか、今もっている迷信をすべてすてなくちゃならない。ですからなかなかできないかもしれません。

〈人の養成〉

それで現実的には、どうしていくのかなといつも思う訳ですが、一番やっぱり納得のいく方法は、子どもの自主性を尊重して、一人一人の子どもをよーく見て、その子に即して、その子の指導法をその場で考えて、その子のいいものをのびるようにするということが、どこかでちゃんとできればいい訳です。結

局、そういうことのできる人の数をふやして、これから生まれる子どもたちが、そういう保育者にあたる率をふやすということじゃないだろうかと思います。一番大事なのは、そういう保育者が養成されるような、実践の場をふやすことですね。こういう現職研究会のような場が、どこにでも近くにあって、人が集まってやっていくことによって、どんどん人が育っていく方向に役立つ努力をしていかなければなりません。そして、私は大丈夫な保育者です、という保育者がどこかしらにいて、そういう先生に子どもがあたる率が多くなってくることが大切で、そのための対策を考えればいいのじゃないかなと思います。

生涯教育なんていうことばが最近出てきましたが、高校生ぐらいの年齢から何歳でもいいと思いますが、そこへきて、しばらく実際に動いてみると、子どもが見える人になってくるというコースをいっぱい作って、最初からある文部省の方針ばかりにこだわらないで、子どもを見て、その子に即して、その子の成長に役立つ動きのできる人を養成して、学校という刑務所の中や、幼稚園という牙城の中に送りこんで、その人にあたる率をふやしていくことが現実的なのかなあ、と思っています。幼児教育について、いつも一方では、畜生め、と思い、一方では、何とかしなきゃと思うし、自分としては、どういうふうに動いたらいいのかな、ということを考えて、今の学校体制とか、学校の準備教育的幼稚園教育について、いつも義憤を感じているところです。

（お茶の水女子大学）

シンポジュームのお知らせ

二月号で予告いたしました「保育のこころを語る」シンポジュームを左のように開きます。多数のご参加をお待ちいたします。

日時　三月二十八日（火）午後一時—四時
場所　お茶の水女子大学附属幼稚園
講師　周郷　博先生　津守　真先生
　　遠藤悟朗先生　外山滋比古先生ほか
司会　本田和子先生
会費　一名五百円
申込　参加ご希望の方は、葉書で、氏名、住所、勤務先、同住所をお書きの上、三月十日までに、お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会宛、お申込みください。一枚に何名でも結構ですが電話でのお申込みはお受けいたしませんのでご諒承ください。

みどり会研究部

おくることば

周郷博

ことば。

「太初にことばがあった……」というヨハネ福音書の「ことば」そのような特別な例を引き合いに出さなくとも、ついこの間までの日本においてだって、この「ことば」は生きている――命のあるものだったし、昔に、古代にさかのぼればさかのぼるほど、「ことば」は「神聖な」真実な、それがなくてはわが人生は意味をもたぬ、という、それほどに大切、必須なものであった。「ことば」が、いたずらにうるさい、騒音の一種、無分別な自己宣伝の具になってしまい、一時しのぎのいい抜け、おべんちゃら、欲望や物欲の取引の具になってしまったことは、かつてこれほどであったことはない。

こんな時代に――いま、幼稚園の年齢を過ぎて小学校へはいる子どもたちに、どんなことばを「送る」（Communicate とあえて言おう）ことができるか。

私は、イギリスが、第二次大戦中にすでに教育の大胆な改革の構想をもっていて、それがバトラー法というものになって一九四四年に成立した。そのあと、イギリスの王室出版所（教育のことは王室出版所 her Majesty's office から出される）から出されたパンフレット――そのいちばん最後のしめくくりに「イエスは自ら言ったことを実行して十字架にかけられた。わたしたちも、またそのようにここに言われたことを自ら実行して責任を最後までとる」と書かれていた。私は、このことを深く心に刻みつけている。じっさい、イエスの十字架、それはその言ったすべての「ことば」を身をもって「実行した」。私は足のつま先から頭のてっぺんまで身ぐるみ震動してゆらぐのを感じる。

私たちは、戦後何をしてきたのか。私たちが発した（？）「ことば」は何であったのか。その「ことば」について、私たちはどんな責任をとっているのか。

一九七一年の春、ここの幼稚園を終えて学校へ子どもたちが行った。これは、私のぎりぎりの誠意。それより他に言いようもなかった。私はこの「ことば」をけっして忘れまい。

ここで幼い日をすごした……二年いた子も、三年いた子もいるけれど、どの子にとっても、もう二度とない、だいじなだいじな幼年時代でした。

君たちは、小学校へはいる。だんだん、からだも大きくなり、心も、何かはりのある、ひきしまったすがたにそだっていくだろう。よい友だちともめぐり合い、ものごとの見かたも成長して、仰ぎ見る、まぶしいような青年になり、お嬢さんになる日が来るだろう。そのときの日本は、世界はどんな国に、世界になっているでしょうか？

この世の中に、変らないものは一つもない。君たちが〝よく変って〟成長してゆくことを、変ってゆく日本と世界にとって大切な人になってゆくことを、私はこの春の日に、祈らないではいられない。

幼年時代を忘れてもいい。けれど、それは〝地下水〟のように君たちの生涯を絶えず〝うるおす〟ものであることを願う。

周郷博

三月に思う

堀合　文子

今年もまた三月を迎え、教師というものは、いろいろの心の動きをひしひしと感じます。幼児期を終えてその上の社会へ進む、幼児たちは、日ごろ私どもが考えに考えた幼児教育を一応卒業して、その幼児教育を身につけて次の社会へ進むのです。

三月がきて卒業させる幼児だから、こういう保育だ、ということはないと思います。

四月、入園してお互いにはにかみあいながら出発したあの時と、三月、万感こもごもで送る時まで同じ保育です。その中で行なわれる教師の指導、行動は違うでしょうが、根本に、底を流れるものは違いません。ただ幼児が成長していることは違います。そして幼児のその成長があるために保育も違ってくるでしょう。

四月になれば小学校です。小学校からは子どもたちの生活の中に学習ということがはいってきます。比較的多くの小学校が、現在は机がみな同一の方向にむき、教師が前に立って話をし、指導するという形です。（もちろんこのような形態でないところもあります）

①「そのような環境にはいっていくので、三月の卒業前の幼児は、あまり遊ばせておくと、学校へいってその形態にはいれないので、時には一斉に集めてその形態になじむ必要がある。そしてそれが三月卒業前の保育の指導である」

②「ちっとも集めることをしないで、幼児を大いに遊ばせ、そのような生活の中でいろいろと個人に応じて指導していくやり方（通称自由保育）だと、小学校へいって授業になると困りはしませんか」「集まる時も、集まれないし、先生のお話もおちついてきけないでしょう」

② 「三学期になったら、五歳児は次第に学校形態に移行して幼児をそのような方向にもってゆくべきだ」「これが五歳児三学期のカリキュラムだ」

以上三つの会話や意見は、常識のように、あるいは当然のように、何のふしぎも疑問もなく話されていることだし、また当然考えられる点でしょう。

しかし、五歳児は、二年なり、三年間、幼児教育をされてきた幼児で、その三学期ならば、多少の不足の面もあっても、ある程度、幼児期としては何らかの結果、幼児教育としての結果が出る時期ともいえるでしょう。

自由保育、自由保育という名称がついているように、幼児を幼児たらしめて充分に活動させて、そしてその生活の中で教師が機会をとらえては、三十五人いれば三十五人みな違うのですから、三十五人、一人一人に適切な指導をくりかえしていく、このような生活のくりかえしが、この三月に、この卒業期には、結果としてといいましょうか、幼児の生活の中にあらわれてくるはずです。また幼児一人一人にも何らかの形で、できあがっているはずです。

★ ある三月上旬の一こま

登園時から、それぞれのグループは、昨日の続きをもう始めている。一人、友だちが来ないと互いにメンバーを待っている。

あき箱のはいっている箱の中を引っかきまわし何か一生懸命考えながらさがしている。

女の人の二、三人のグループは、おえかきの帳面にたのしそうに絵をかきながら遊んでいる。

幼「先生レコードかけて」

先「何のレコード」

幼「シンデレラ」　（レコードをかける）

シンデレラ始まる

幼「かわりばんにシンデレラになりましょうね」

何か紙と鉛筆を持ってきてかき出す。みんなまわりに集まる。シンデレラになる順番をきめたらしい。一番目、二番目、三番目と……。

幼「妖精が一人たりない」「○子ちゃん妖精になって」交渉なりたったらしい。

いきなり男の人の方へかけていったら、○夫ちゃんをつれてきた。王子様の交渉がなりたったらしい。

いよいよ〝シンデレラひめ〟の始まり。

曲は順次進行。だいぶ前から劇遊びをして遊んでいたが、もう役割の分担や、そのものになりきっての表現は、教師もびっくりするくらいになった。服装も、何かあるものでそれを適材

適所に使ってやっている。たりないものは、いそいそと紙で作っている。

幼「先生、馬車がたりないの、なって」

教師も他の人の指導をやめて馬車になる。

それぞれの役割を実に満足げに熱心にやっている。

外で遊んでいる幼児も、室内の幼児も、それぞれの場面で、たとえ小さくてもその人なりの力を充分発揮して、実にたのしそうに、それぞれの遊びに没頭し、満喫して生活している。けんかになりそうになっても、いつしか話合いになって解決したり、〝あ、ごめんね〟〝あ、ごめんなさい〟こんなことも板についたという所です。

親が我子を、〝大きくなったものだ〟とつくづく感じるようなもので、教師よりはるかに大きい（精神的に）、と思われる時もあるくらいです。

こんな幼児が五歳の三学期でしょう。

幼児の成長と共に、幼児の教育の面も、いろいろな場面であらわしてくれるので、教師の顔と心は笑み満々な時期ではないでしょうか。こんなことも、ああよかった、と心配していた面もどうやらと安心するのもこの時期でしょう。それと同時に、二年、三年経過してきた教師の努力は、幼児たちを離したくない、小学校へあげたくないとの状態にかえてしまいます。教師だけでなく幼児もではないでしょうか。

教師は……。

残り少なになっていく日数をかぞえながら、教師はどうしたらよいでしょう。教師だって個性があり、みな違う人間です。幼児との心のふれあいはみな、ちがうでしょう。

前述のように、この時とばかりに学校形態の訓練をする必要もないでしょう。むしろ、二年、三年の間、自由にのびのびと幼児の生活を充分にさせながらその中で指導してきたならば、今さら、ここへきて、ある時間じっとさせたり、集団訓練的なことをしなくても、充分にその能力はできているはずです。日ごろの遊びの中の指導、いろいろの繰返しの指導、が一見、遊び放題のようにみえても、その中で育ってきたものは、育ってきた能力は、学校形態にはいれば、学校形態に順応し、静かにすべき時はちゃんと静かにし、また必要に応じて判断して行動し、授業もやる時は一生懸命集中してやるだけの力はもう、できているはずです。

幼児期というものを充分に、幼児の仕事である〝遊び〟を満喫しているので、学校へいって、授業中にはかえって静かに行儀よくできるでしょう。それが、幼児期に常に集団行動のくりかえしをしていると、単なる習慣として集団行動が身についた

だけで、その中に育成されたものは、〝先生のいうとおり〟だけです。これは一見よいようでしょうが、幼児自身の考える力や創造性が養われなかったり、自発性がないと、生気のない、いきいきと活動的な頭の働きも行動もとれない幼児になっているでしょう。

いろいろと、幼児がする技術とか、知識的なことをたくさん教師の方から与えてあれば安心ではなく、かえって学習のじゃまになるのではないでしょうか。自分は、「ああやった、ああ幼稚園でやって知っている。そんなことは知っている」というと、幼児の興味や、注意力、集中力は授業に集中しないで、その時の他のこと、それがいたずらになったり、またぼやーっとになったり、人によって違いますが、こんな形にあらわれてしまいます。たとえ、表面おとなしく聞いているようでも、小学校の先生のおっしゃるとおりしか受取ってこなかったり、低学年の時はそれで通っても、いざ、自分で考えて処理したり、勉強したりしなければならない時期に、その人の力がでないことになります。せっかくもって生まれた能力も出せないのです。

幼稚園の先生は、ベテランならベテランほど、じょうずに指導し、教師もたくさんよいことを指導し与えてきたと思いますが、果たしてそれが小学校へいって、本当にその人が生かされるだけの力を養ったかどうか、うっかりすると知識や表面の能力だけで、教師は満足しても中味のないからっぽの幼児を育ててしまっているのではないでしょうか。

二年間、三年間いかに幼児を指導してきたかによって、今、この三月に、何らかの形で、幼児の顔にも、その教師の評価はでてくるのではないでしょうか。よい保育の積みかさねです。一時たりとも、一瞬たりとも、一人でもみのがしてはなりません。また一人でも幼児の心を一瞬もおろそかに扱ってはなりません。その場、その時、その瞬間に、教育の場、指導の場があったのです。その成果ともいいましょうか。自由な保育のこつの一つともいえます。二年間、あるいは三年間の幼児の姿なのです。教師の指導の積みかさねがものをいう時です。

この三月は幼児の成長を喜びつつ、幼児と思う存分遊んであげましょう。たのしく、よりよく、たのしい思出をつくるために。そして、その中でみつけた、注意すべき点、指導すべき点、幼児が忘れた点など〟あら、忘れちゃったわね〟〟この方がよいわね〟と、うながしてあげましょう。こんな三月が、卒業期をひかえた毎日でしょう。

入園時から、幼児を幼児として充分生かして生活させることが大切で、その点で幼児の中には大きな差ができてしまうのもこの時ですね。そしてこの時こそ、教師が自分の道をふりかえる時であるでしょう。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

ユートピア

子どもの“その”

清水さよ子

幼稚園、保育園、どちらにもついている「園」という字。〝その〟〝にわ〟美しいひびきをもつ字である。植物園、動物園、ともに園という字が書かれている。何か共通したものがあるように感じる。

自然物と生きもの。あいらしさとたくましさ。そこには人の心をなごやかにしてくれる素直さがあふれている。

現在の幼稚園、保育園、いや社会の中にいるこどもたちが、みなめぐまれた環境にいるとはいえない。むしろ公害、交通戦争、遊び場の縮少とだんだんおいやられていくようなやりきれない気持になる。

植物園と動物園とをいっしょにしたようなこどもの〝その〟があったらどんなにいいだろう。四季の花、木の葉のトンネル、土の香りに土の山、いっしょに遊ぶうさぎやあひる、そして思いきり走りまわれる広い庭、草の原っぱでごろごろころがるこどもたち。次から次へと夢ははてしない。

めぐまれた環境がいかに大切かはいうまでもないが、目の前にいる私たちの園児ひとりひとりの心の中にも、美しい心の〝その〟があるのではないだろうか。

心の中に小さな小さなたねがまかれ、日がてり、雨がふり、風がふいて成長していく。時にはひでりにみまわれ、強い風や強い雨、そのようなことにもめげず成長していくたくましさ。

幼い心の中は好奇心でいっぱい、どこを向いても幼い心は躍動するだろう。つかれをしらない幼い心、失敗し、迷

い、何でもやってみる、何度でもやってみる幼い心。

幼い心の芽はやわらかく育っていく。

私はもう二十年近くも前からの友といっしょによく郊外にでかける。目的は何百年か前の古い昔をさぐりながら、お寺や庭、そこにたてられた石の仏などを見て歩く。

山に魅せられて山を歩く人、海にひかれて船にのる人、自然の雄大さにひかれることはもちろんだが、そこにたっているもろもろの美しさにまた目をひかれる。

一本の柱がかけても平均をうしなうような美しさ、やねの反(そり)の流れるような線、五輪塔のはちきれそうな丸み、形よくふくらんだ宝珠、均整のとれた塔など、どれをみても目をうばわれるものは多い。

それらの美しさの中の何にひかれるのだろう。豊かさ、あたたかさ、おだやかさ、その中にひきしまった心がある。きびしい心がある。

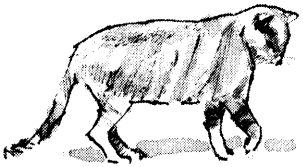
柔軟な幼いこどもたちの心も成長とともにきびしさをもってほしい。

現在の環境を急に作りかえることはできない。こどものくにや自然遊歩道、また自然を保護する運動や自然をとりもどす動きもはじめられている。私達も幼稚園のよりよい環境に努力することはもちろんだが、現在の環境を生かしてよりよい教育をと努力している。

そして柔軟な、好奇心のかたまりのような幼い心に対応していけるおとなの心をもとうと努力している。固まってしまった心には、一方的にしかものが見られなくなり、好奇心も失い、美しさも感じる余裕がなくなってしまう。固まった心では幼児の伸びようとする心の芽をつんでしまう。

夢のような環境の中でも、現在の環境の中でも、幼い心をくみとり、育てるおとなの心のあるところに、本当のこどものしあわせの〝その〟がまっている。

（目黒区立月光原幼稚園）



幼稚園のおひなまつり

片岡霊恵

まえがき

二月中旬には、短大の学年末考査が終わるので、それから、学生に幼稚園の見学や参観をさせたいと思い、お願いに行くと、「おひなまつりの準備でいそがしいので」とお断りをいただくことが多い。または「生活発表会を卒園式の前にするものですから」とか、お別れ会やら、卒園記念アルバムの製作など、とにかく、二月の終りから三月上旬にかけて、幼稚園は大変いそがしいようである。

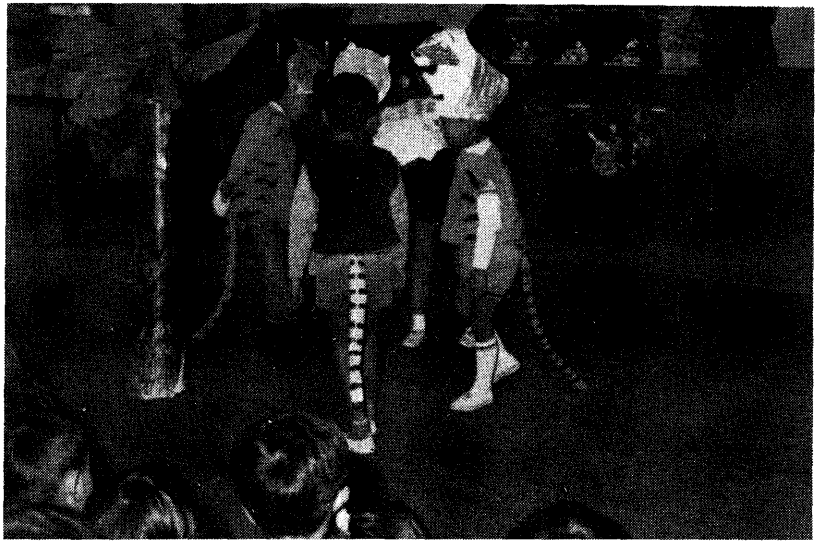
そのいそがしさをこそ見せていただき、できる範囲で、先生のお手つだいでも……と思って、なおお願いすると、「もうメチャクチャにいそがしくて、保育らしいことしてませんので。当日には何とか格好がつきますからその日に来てください」とおっしゃる。こちらは、未熟な学生たちが数人もおしかけ、お邪魔ご迷惑をかけるので、そのようにいわれると、引きさがるよりほかはない。

ただ、これは、三月に限らない、たしか、春には「母の日の行事で」とか、夏は「七夕まつりで」、秋は運動会、冬はクリスマスと、行事のあるころ、いつも経験することなのである。

保育の現場をはなれて十年近くなる私だから、ピントがはずれたことを考えているかもしれないが、幼稚園のひなまつりという題をいただいたので、年中行事と保育カリキュラムとの関連についても若干の考察を試みてみたいと思う。

一、ひなまつり—生活発表会

毎年、二、三の幼稚園から、ひなまつりへの招待状をいただく。かわいらしいデザインのカードに、盛沢山のプログラムが並んでいる。大体、十時にはじまって、十二時ごろまでかかる



見当である。大きな幼稚園になると、遊戯室が狭いからとの理由で、二回に分けたり、市内のホールや劇場のようなところを借りてする場合もある。プログラムは、歌やダンス、リズムバンド、オペレッタ、それから劇あそびなどが並び、人形劇や映画を業者にさせたり、お母様方のコーラスや劇などを加えている園もある。

一度、劇場を借り切って催されたひなまつりに行って見ておどろいた。午前の部、午後の部と、一日中あり、家族がお重詰めのお弁当もちで行くのである。ステージには、ドーランを塗り衣装を着せてもらった園児が、次々と出て来て、レコードに合わせて、踊ったり、マイクを使って、劇らしいことをしたりする。照明のライトが光り、写真のフラッシュがきらめく。

わたくしは、とにかく、びっくりしてしまい、このような幼稚園の先生も親も、どんなにしんどいことだろうと同情した。でも、商店街にあるこの園は、家庭には大変評判がよくて、いまも盛大に、このやり方をしていると聞く、

幼稚園のホールでするひなまつりは、これほどはないにしても、形式、内容は、同様だと思う。お母さん方の目は、ステージ上のわが子だけを追い、先生方は、自分の組の出し物が、うまく行くようにと一生懸命である。

そして、おひなさまは、わきの方で、ほこりにまみれている。

三月という時期だからであろうか、いわゆる、生活発表をかねることや、お別れ会、または、新入園児を招待するのに、ひなまつりが利用されることが多い。もちろん、こういった行事はそれぞれ意義があり、教育的な評価もあるからこそ、行なわれているのだと思うが、その内容が、ほんとうに、こどもたちの、この時期の成長や発達にふさわしいものかどうかが、よく検討されているだろうか？　どうも、私には、このごろの幼稚園の行事の内容に、ショー的な要素がふえてきているように思われてならない。一年に一度ぐらい、大勢の前に立って自分自身を表現し、発表するという経験をさせることは必要だし、大変よいと思うが、大体の園では、三、四回はあり、先生の負担とこどもの疲労が多いように見受けられる。

招待されるお母様方は、その度に何を着てゆこうかと心をなやまし、先生方も負けずに、洋服を新調したりする。こどもたちを中心にした一日を楽しむといった意義を認めることはできるが、いそがしくて保育らしいことができない日が、行事のあるたびにふえるのは問題ではないだろうか。

二、保育らしいこととは？

「保育らしい保育ができない」という言葉の裏には、ふだん着の、何事もない平日の幼稚園の生活こそ、本当の保育のできる場なのだという意味があるようだ。たしかに、特別の行事を控えている数日は、こどもたちも、先生も、胸を高鳴らせ、また緊張する。特に、先生は、あれもこれもと気を配り、からだもこまめに動かさなければならない。そして、その行事を立派にするためには、平生の細かな生活指導や、一人一人の個性を育てる保育の面がいくらか抜けてしまうのであろうか。そしてそのようなちょっと、うしろめたい先生の気持が、「保育らしいことしていないので」という言葉になるのであろう。

しかし、私はこのように考えたい。こどもたちも教師も、クラス全体が、また、園の皆が、一つの目標を目ざして、精一杯、いきいきとして活動する日々こそが、ほんとうの保育の日々であるはずだと。劇に使う小道具をつくるのに熱中していて、外遊びの時間がなくなってしまったり、リズムバンドの楽器が足りなくて、積木で代用することを考えたり、とにかく、皆が、積極的に、協力する生活が、営まれていれば、そこに少々の時間的、空間的な乱れが見られようとも、それは、やはり保育らしい保育であろう。

大切なことは、行事のような生活のアクセントを、どのぐら

いの間をおいて、また、どんなやり方で、とり入れるかをよく考えることだと思う。

三、年中行事を考える

現代社会における年中行事は、変わってきた。その種類も、また、あり方も、年々違ったものになってきている。ひなまつりに限らず、お正月、節分、七夕、お月見といったような季節の変化を印象づけるような行事や、彼岸や、お盆、クリスマス、イースターといった宗教行事、また、主として神社中心の地域の祭まで、一年のカレンダーのほとんどを埋めるくらいの数があるが、これらの行事を一々追いかける必要のないのはもちろんである。

元来、社会的な年中行事は、同じことの繰り返しになりやすい人間の生活に変化を与え、季節の区切りや、社交生活の折目を教えると共に、人々が集まって楽しむリクリェーションの意味ももっていたようだ。しかし、社会の仕組が複雑になり、生活のテンポがはやまってきて、わたくしたちは、何事も、インスタントに片づけようという傾向になってきた。そこで、年中行事に伴なって、食べる物、着る物の準備や、家の内外の飾りつけなども、自分でつくることをやめて、買ってきてすますということになる。コマーシャリズムが、それに輪をかける。中には、もう滅びかけていた行事が、デパートの宣伝で復活したなどの例もあるくらいである。

学校や幼稚園が、年間のカリキュラムに組み入れる行事は、教育的な価値をもつものとして厳選されるはずであるが、まだ、長年の惰性から、踏襲されているような行事がないでもない。ひなまつりも、その一つと考えられないだろうか。人形をかざって、その前で、女の子たちが、楽しくあそぶという本来のひなまつりを、現在の多くの幼稚園のような盛大な、おゆうぎ会や「生活発表会」に置きかえるのだったら、むしろ、ひなまつりは、家庭に返してしまった方がよいと思う。五月の節句、母の日、七夕、お月見、節分、誕生日なども、同様なことがいえよう。

母親たちは、幼稚園に出て行って我が子を見る機会をへらして、そのエネルギーを、家庭の楽しみを創り出す努力に費やしてほしい。そして、先生方は、見せもの本位の行事でない行事を、こどもたちと共に楽しめるような方向にもってゆくべきだと思う。「なぜ、ステージで歌ったり踊ったりさせてはいけないのですか。こどもたちは、とても喜んで楽しんでいるのですが」とおっしゃる先生もあろうが、そういう先生は、客席にす

わっていた経験のない方だと思う。うしろから見ていると、出番のすんだこどもたちは、すぐあきてしまって、じっとしていない。お友だちの歌をきいてあげるなどというエチケットを期待するおとなの方が無理なのである。お母様方も、自分のこどもの出演だけ見れば、もう用はないので隣の人とおしゃべりに夢中になるのはいい方で、さっさと帰ってしまう人さえある。

このような行事を何度やっても、骨折り損のような気がしてならないのは、私だけだろうか。

四、米国の幼稚園で

米国の幼稚園にもいろいろあるので、一概にはいえないが、大体において、日本の幼稚園の空気よりも、のんびりしている。日本では、どの町でも、幼稚園を訪ねようと思えば、こどもの声が、またはレコードの音楽が聞えてくるのですぐ分かるのに、米国やヨーロッパの国々では、そうはいかなかった。こどもの数が少ないこと、建物の構造の関係もあろうが、とにかく、静かに、おちついて、ゆっくりと遊びに熱中している姿が印象に残っている。そして教師は、あまり動きまわらず、しかも注意は配っているのだが、こどもの方から何かいってこないかぎり、こどもに話しかけない。ピアノやオルガンのような鍵盤楽器も、クラスに必ず備えられているわけではなく、静かなのは、そのためでもあろうか。いわゆる、行事や催しなどもほとんどなくて、入園や卒園も式のような形式はとらないようである。時には、パーティーをするが、大抵は、教室内でそのクラスのこどもと先生だけで楽しむのである。私が週に二日ぐらい、参観に行っていた五歳児のクラスが、二月十日にバレンタインの日のパーティーをすると張り切って準備をしていた。赤い紙でハートをいくつも切り抜いて、まわりにレースペーパーの飾りをつけたカードに、毎日せっせと、自分の名前を書いて、友だちの名前が書けなければ、先生に書いてもらい、バレンタインボックスに入れている。かれこれ一月ぐらいつづいたであろうか、その間、先生は、特別にいそがしそうでもなく、こどもが帰ってから、バレンタインボックスを開けて、誰が誰にカードを送ったかをしらべ、一枚ももらえない子どもがいないようにチェックするぐらいのことだった。いよいよ当日になり、何か、晴れがましいことが起こることを予想して行った私の前にくり広げられたパーティーは、何のことはない毎日のジュースに代わってアイスクリームが配られ、紙ナプキンに赤いハートの飾りがついただけ。やがて、皆の見守る中で、ボックスが開かれ、先生が、一枚ずつ名前を呼んで、カードを渡しはじめると、こども

たちの目は期待で一杯になり、ありがとうといって抱き合う子もいれば、何枚もらったと踊り歩く子もいるというように、楽しい気分が盛り上がったところで、「ハッピーバレンタイン」の歌を皆で歌って、終りになった。先生が、一番よく字の書けるナンシーに書かせたらしく、私もきれいなカードを一枚いただいて、生まれて始めてのバレンタインデーの思い出になったことである。

日本の幼稚園のお祭りさわぎになれた私たちは、物足りない感じがしないではないが、本当の意味で、こどもの心を育て豊かにする経験や活動とは何であろうかと考える時に、このように素朴な行事のやり方も参考にすべきだと思う。

おわりに

〝どこかで春が生まれてる、どこかで芽の出る音がする……〟こんなのんびりしたメロディーを口ずさみながら、明日、こどもたちにつくらせるおひな様のかたどりをしていると、「先生、今日も、あられが半分ぐらいへってます」とお掃除をすませた先生が、職員室にはいって来るなりいう。「どうも、○○ちゃんたちがあやしいわ。食べるのかしら、それとも持って帰るのかしら」「明日は、このままにしておいて、こどもたちと話しあいましょう」その結果はどうなったか忘れてしまったけれど、私の現役時代のひなまつりの思い出といえば、このくらいである。あとは、当日、人形芝居をしてあげようと準備をしていて、夜半までかかった時のこととか、雪国の三月三日には、桃の花がなくて、紙でつくったことなど、もっとも、小さい幼稚園だったからかもしれないが、あまり大さわぎをした覚えがない。

もちろん、世の中は刻々変わる。現代は、そんなのんびりした気分では暮らせないといわれる。しかし、古いもの必ず悪いとはいえず、新しいもの必ずしもよいとはいえない。保育のあり方にも、変わるべきことと、変わらないことがあると思う。時に、古い卒業生の先生方から、「保育科の授業の内容は、私たちのころと全然変わってません。もっと新らしいことを教えてください」とお小言をいただくことがある。古い伝統にあぐらをかいて、新しい社会の変化に適応しようとしないのは考えものであるが、古くても、よいもの正しいものは残しておきたい。だが、何が、ほんとうによいものかを見きわめるのは、大変むずかしいことだと、しみじみ思うこのごろである。

（平安女学院短期大学）

書評

土屋とく

「幼児心理学」

山下俊郎著　朝倉書店

赤い表紙にくっきりと刻まれた白文字。こどもに関心をいだく者が一度は手にし、あるいは本棚に備えて問題を感じるたびに保育の手引きとしてひもといてきた貴重な本の一つである。

初版は昭和十三年とのことであるから実に三十数年の長きにわたって乳幼児理解に貢献してきたことになる。この間の時代の流れはそのまま日本の保育界の歴史を物語るが、今日のような発展を目のあたりにする時、当時荒野にまかれた〝一粒の麦〟は確実な〝みのり〟を豊かに示してきているのだと感動を覚えるのは私ひとりではないだろう。

しかし学問の進歩や保育知識の普及は、本自体の成長をも迫ってくることになる。心理学の新しい資料が提供され、対象たる子どももまた発達の歩みを早めたり質的な変化を見せる面も出てくるからである。

何度か改訂を重ねてきたこの本も新たな要請のもとに再び書き改められたわけであるが、著者の健康がすぐれず部分的な改訂にとどまったのは残念とはいえ、言語、数、思考、テスト（特に人格検査）等近来の動きは確実に示されているし、嫉妬の取扱いにあたたかい配慮が加えられているのも、一貫して流れるこどもへの愛情が感じられてうれしい。

あらたな生命が与えられた「幼児心理学」が母親、保育者の道標として今後もゆく道をさし示してくれることを信じる。

「保育者への一つの指針」

金沢、平井、乾、八杉、城戸（共著）

フレーベル新書　2

「保育の手帖」（昭和四十四年四月～同四十六年三月）にのせられた同名の小論を一冊にまとめたものですでに読まれた方も多いと思うが、「カリキュラムの基礎」「教育制度の再編成」「保育者同志の連帯感」について各先生の発言はそれぞれ現場の保育者に対するあたたかい助言やすぐれた卓見に満ちている。

たとえば、人間のこころと愛情・問題の子をとおして現実の子どもをもう一度見直す必要を・科学者としての子どもの見方への反省を・長い教育心理の研究と実践からの意見を・仲間づくりの必要性と勇気づけを・等々一つ一つが読む者の心の中に光を投げかける。

毎日の保育活動の中で疑問に思い、ひとり心の中で悩みながらも現実の制約と労働の厳しさについ流されて、深く考えることをあきらめてしまいがちな保育者に反省と確信を与え、迷路の中での進むべき方向の手がかりをしるしている。

こうした指針をふまえて、保育者自身が冷静な目とするどい判断力をもって自らの道を選び、ひとりひとりが地についた歩みをすすめてゆくことが最も必要なことなのだと思われる。著者もそれを望み助言を惜しまないのだと思うゆえに……。

「0歳児集団の発見」

原田嘉美子著　風媒社

0歳児の保育がむずかしいものであることは誰も認めるところであろう。初めて母親になった者は、特にこの新しい経験に喜びと共に多くの不安を感じながら夢中で毎日を過ごすことになる。しかしこの若い母親の中には職業をもち妻と母を両立させていこうとする人たちも多いのだ。

産休明けつまり生後四十三日目から職場に復帰するために、はち切れるようなお乳をおさえて子どもを保育園へ預けにいく。そういう人々が安心して働ける、そして子どもたちが健やかに成長できるような理想的な保育園が数多くあったらという声は各地に満ちている。この本は原田さんという意欲に満ちた保育者が0才児の集団保育を実践した共同保育所からの報告である。

現実の切実な要求と、保育者のもつ熱意とによって行なわれる活動は、乳児保育の限界をつき破るだけのものをもっているようである。

長い経験のもたらす判断力と、見通しの確かさをもつ者が責任をもって周到な計画を立て行き届いた管理のもとで年齢の近い子ども同志刺戟を与え合いながら保育をしていった時、核家族化の進んだ分断された家庭での保育では得られない利点があるのではないかと感じさせられる。

既存の心理学書にあきたらなさを感じる筆者が、0才児にも、月齢に応じた目標を立て、正しい刺戟→発達の助長、を積極的にすすめていこうとしている。この努力に期待する。

共同保育所の運営のむずかしさもさることながら、問題をつきつめてゆけばゆくほど現代のもつ各種の矛盾を認識させられる。

幼稚園にのぞむこと
——すばらしい人間としての幼児をみつけよう——

牧田和子

幼稚園にのぞむことについて、何か私の感じていることをとのお申しつけで、ここに、日ごろ感じておりますことを、しるさせていただきます。

1　こんな子がいいな!!　というが

「幼稚園に入園すると、三歳の子も、四歳の子も、五歳の子も、急に大きくなったような気がする」とある幼稚園の先生がいわれた。そして「子どもは、親の所で甘やかされて育つより、友だちや先生と一緒に、団体生活をしてもまれなければいけないし、きちんとさせなければならない。とかく最近の若い親はしつけができていないので、園ではきびしくしつける必要があります」とつけ加えられた。入園に際して、どのようなお考えで園児をお決めになるのかうかがうと、

「名前を呼ばれたら返事をするようになっていること。いわれたことに対して理解できること。友だちと、特にかけ離れた行動をしないで一緒にできるような子どもであること。先生のいうことが守れて、はきはきした明るい子がいいですね」というお返事だった。

さて、生後三年、家庭の中で育てられ、家族、特に母親との結びつきの強い三歳児にとって、見知らぬ園長先生の前で、はきはき答えて、おちついて行動できるだろうか。もしも、口もきかずに、母親の手を固く握りしめて、母親のうしろにかくれたりしていると、そういう子どもは入園できなくなるだろうか。もし、のろのろと行動していたら……もし、自分勝手に振舞い、しゃべり続けていたら、……と、いろいろな行動様式を示すであろう幼い子どもたちを思い浮べてみた。

某先生のいわれるように、元気で明るい、はきはきした子は、誰がみても「いい子」であろう。だが「いい子」は、いつ、ど

こで、どのようにして、育ってくるのだろうか、と考えると、三歳児にして、このような入園基準でしか見られないとしたら、子どもは生後三年にして、人生の岐路に立たされるのである。三歳児にして、できのよい子どもと、そうでない子どもが、ふるい分けられるのであるから、もしどこの幼稚園にも入れてもらえない子は「普通ではない」というおすみつきをいただいたようなものである。

世の母親の中には、ただ、食物や衣服や遊具を与えておけば、そのうちに大きくなって何でもわかるようになる、と思い込んでいる人たちも存在する。これは、親の問題、育て方の問題である。幼児教育の場が最も必要なのは、こうした家で、ただ大きくなる時間を待たれている子ども、さらには、放任されている子ども、どこかに障害があって友だちと接する機会に恵まれない子どもたちであろう。

子どもが育つ、というのは、人間が、人間を知る機会を与えられることから始まるのであるから、母親、父親、きょうだい、友だち、おとなたちに、楽しく、気持よく、何回も出合うようにすることは、必要なことといえる。「こんな子がいい子!!」という注文のしかたは、おとなが子どもに期待し、先まわりして、その型にはいらないのは不良製品視するという、「人間を忘れた見方」といえないだろうか。「こんな子がいい子!!」というのは、むしろ、子どもがおとなに示してくれる人間の生き方ではないだろうか。それゆえに、一通りではなく、毎日、毎時間、毎分、その一つ一つの瞬間の中で、子どもたちは、おとなにむかって、「こんな子がいい子なんだよ!!」といっているのではないだろうか。それは、おとなが見つけなければならないもので、おとなが待っていて、網をかけるものとは異なるものだろうと思う。

最近、幼い子どもと接することが多くなったので、特に次のことを述べたい。

2　育てること

「もうすぐ幼稚園にはいるのに、話をしないのですよ」「言葉が少なくて、遅れているのでしょうか」「本を見たがらないのですよ」「遊んでも一つも片づけないし、世話がやけるのです」「小さい時は、おとなしくて手のかからない子どもでしたけれど、幼稚園にはいってからは、何やかやうるさいことをいいだして、世話がかかります」

母親たちの訴えをうかがうと、目の前の子どもたちは、相当

に困らせる子どもらしい。

ところが、Hくんはこういう状況だった。

「話をしない」「言葉を知らない」「友だちが来ても知らん顔で勝手なことをしている」「何かいっているので声をかけると黙りこんでしまう」「誰のいうこともあまりきかない」

口をきかない自分勝手な子どもだ、とその母親は思っている。父親は、そのうちによくなる。男の子は概して発達がおくれるが、大きくなれば問題はない、と考えている。園の先生は、みんなと一緒の行動がとれないので、集団生活をさせるのは無理だろう、と考えられて、教育相談を受けることをすすめた。母親が来談された。その情報を集めてみると、生育史では次のことが明らかになった。

出生時・母子共に健康状況良好、問題なし。

乳児期・栄養、母乳と人工栄養、発育良い。

一　歳・母親は一人っ子のHがおとなしいので、編物や洋裁をよくした。

・近所には家がなく工場内一軒の社宅で、つき合う人もなかった。

・町に買物にでる時は父親が面倒をみていて母親は急いで行って来た。

二　歳・お菓子、おもちゃなどほしがることは少ない。与えれば喜ぶ。

・おもちゃは乗物（自動車、ダンプカー、汽車等）を好む。

・へやの中を走りまわるとか、動きまわることは少ない。

・病気はほとんどしない。

・三歳に間近くなってからは、テレビの子ども番組の時間になると、自分でチャンネルを合わせようとする。

三　歳・話をすることは少ない。言葉（語らい）も少ない。両親のいうことは理解できる。本人が話をする時の発音は明瞭である。

・病気をすることは少ない。

・絵本はのりものの絵をみるだけ。

・ひとりごとはいっているので、声をかけると黙ってしまう。

・忙しい時になるとぐずぐずいうので、母親が手伝ってしまう。

四　歳・新しい家に転居した。周囲は新興住宅地で、家は多いが、一、二歳児が多い。

・幼稚園にはいる。

・母親は、子どもが大きくなったので家で内職を始めた。母親の仕事を邪魔することがある。
・一度歩いた道はよく覚えていて、他の道へそれたりすると怒る。
・身体は健康で、外遊びは好きになってきた。三輪車をほしがる。
・強く一度禁止するとあきらめるので、扱いやすい。

母親から子どもへの話しかけ

乳児のころから、あまり泣いたりぐずったりしなかったので、一人で寝かせておいた。（くわしくきくと、母親は乳児のそばにあまりいたことがなく、隣のへやで自分の仕事をしていて、子どもの目覚めた瞬間とか、おしめがよごれてぐずぐずいい始めた時のようすなど知らない。）

また、授乳時、入浴時、おしめをとり替える時も、母親は黙ってしていた。

抱き上げるとか話しかけるとか、歌をうたってきかせる等は、二歳、三歳のころもしてあげたことがない。父親は、ひざにのせたり、かた車をして遊んだりする。その場合、キャッキャッとはしゃいだ。

現在は、自分勝手が強いので

「いうことをきかない子はきらいですよ」
「ちゃんと片づけなさい!!」
「自分のことは、自分でしなさい」
「いうことをきいたら、○○買ってあげる」
「わがままいっているとパパにいいつけますよ!!」等で、ほめることはほとんどない。内職の仕事の最中に話しかけてきたり邪魔をするので、きつく叱る。そばへ近寄ることを禁止している場合が多い。

Hくんの「話をしない。自分勝手な振舞いが多い。集団の中で一緒に行動することが大変である」という訴えの問題行動を考えてみたい。

なぜ、話をしないのか。
言葉を知らないのか。
みんなと一緒の行動がとれないのか。

Hくんについて

なぜ……できないのか、とみることに、まず誤りがある。なぜ……できないという状態が今でもあるのか、どんなことをしてあげたのか、というHくんへの働きかけと現況をみる、という見方をしなければならない。

話し言葉の状況一つを取り上げてみても、Hくんは話をしな

いというが、話ができないのではないのだ。ひとりごとはいうし、必要な時ははっきりいう。だがそれは一方交通の話しことばであって、人と人とのつながりを必要とする人間関係の発展としてのコミュニケーションの必要を引き起こすものになっていない。

つまり、人と人とのつながりが育てられていたであろうか。Hくんとおかあさんが、言葉を必要としたのはどんな時、どんな場面であったろうか。母親のふところで暖かく抱かれ、母乳を与えられている時、ほほをなでられ、顔をみつめて語られ、笑いかけられていたであろうか。Hくんは、こうした経験がきわめて少ない。母親はだまって乳を与え、だまって着替えをさせ、だまって抱き、おぶっていたという。身体的愛撫と、やさしい言葉の響き、そしてやさしい表情があることと無いことは、人間が人とのつながりを学習する上では、大きな差異をもたらすことである。

情緒の分化のおこる発達のプロセスで、Hくんは大きな忘れものをされてしまっている。しかしHくんは幸に健康な心身をもっていたために、おとなへの警告として、話をしない状況、ひとりごとをいうがすこしでも声をかけると黙りこむことを示し始めたのだ。

「あなたは今、私になにをしてくれるのだ、私は今、あなたを必要としない」

「あなたが声をかけたいと思うのなら、いつ声をかけたらいいのか、その機会を早くみつけなさい」

「もっと、私を楽しくさせてくれることをあなたは考えなさい!!」

この警鐘の聞こえないおとなに注目したい。

その後、Hくんはプレーセラピーの中で、話をしないわがままな子から脱皮した。

黙っている、声をかけられると独りごとをやめて、黙ってしまう。ということは、Hくんにとって、声をかけられるということと、楽しくない状態との結びつきが強いことであり、本人にとって、いやなことに重なっていることにほかならない。楽しいことと、話しかけを結びつけていくことである。

子どもが育つ、というのは、育てられる時の働きかけをのぞいて、育った結果だけをみてこの子の育ち方を評価してはならないことを、Hくんは教えてくれた。

広い工場敷地の中の、たった一軒の社宅で、若い母親は子どもに話しかけたい、歌ってきかせたい、遊んであげたい、とい

う気持をわきおこすであろうか。育てられる環境と、そこに参与した人間のダイナミックスを、もう一度とらえなおして、このHくんに出合うとき、今、Hくんに話しかける言葉、一緒に遊ぶことの一つ一つが思い当たってくるのである。

ここに、育てられる子どもの人間との出合い、相手としての遊具との出合い、心を表わすことばの操作が伸びてくるのである。Hくんを見ていると、人間は動かない固体ではなくて、よく変わっていくものだということを痛感させられた。

3　受け入れるとは

「S子ちゃんは口をきかない子で、幼稚園に入園してから受け持ちの先生は、ほとんどその声をきいていません。どこか悪いのではないでしょうか、ちえ遅れか、異常児か、はっきりわかりませんが、幼稚園では何をしていても口をきかず、ぐずぐずしているので困ります。家ではよくはしゃぐと親はいっています。集団生活は不むきな子だと考えますので、相談をお願いします」

某幼稚園の主任の先生の紹介状をもって相談申し込みにみえた母親は、「この子は異常児だといわれておりますので、どうぞよろしくお願いします。親としては、どうしても異常とは思いませんが、園ではいつもいわれます。どうしたら口をきいてくれるでしょうか」と深刻な表情で小声で訴えた。数日後、私はそのS子ちゃんと母親に再び会い、S子ちゃんの相談を担当した。母親の面接担当者は他の相談員の先生であった。

S子ちゃんは、母親と離れるのにまず時間がかかった。同じ時間に、S子ちゃんと母親は別々のへやで遊んだり、お話したりして帰る時に会うように約束して別れた。

S子ちゃんと私は、遊戯室にはいった。「このおへやでは何をして遊んでもいいのよ。窓、鏡、蛍光灯をわってしまうと危険で、先生だけではあなたを守ってあげられないので、それだけは気をつけましょう」この約束で、あとは自由にしてよいことを告げた。S子ちゃんはプレールームの戸の所でこっくりした。私も室内のよく見えるところ、S子ちゃんに対してもさりげなくしていられるところに立った。少し戸だなに寄って、止まることも、行動することも容易にとれる姿勢を保った。

S子ちゃんは、自分でドアをしめると、首をすくめて、上目づかいで室内を見わたした。私は、S子ちゃんに「何をして遊びましょうか」とか、「もっとこっちへいらっしゃい」とか声をかけずに、S子ちゃんと同じようにゆっくり室内をながめまわした。もしS子ちゃんと目が出合っても同じ表情でいること

のできるながめ方である。

S子ちゃんが、入口でぐずぐずしているのではなくて、今、おへやをゆっくりみている、たしかめている、という気持を大切にしたかった。今、上目づかいで眺めているあり方を、そのままの形で、認めたかった。この、遊びにはいる前の姿勢は、S子ちゃんに、どうしても必要な時間なのだから当然の姿勢であり、当然の時間経過として受けとった。S子ちゃんは四十分間そこに立っていた。そして十五センチぐらい前に、かすかに動いた。十分間かかった。第一回目の出合いは、こうして終わった。「S子ちゃんのお遊びの時間は、きょうはこれでおしまいよ」と 時計を指さすと、S子ちゃんはにっこりして見上げてへやを出た。廊下で母親にあうと、S子はにこにこして近づいた。「おかあさん、おもしろかったよ!!」とつたえていた。母親は「先生に何をしていただいたの」と聞いたが、S子ちゃんは「おもしろかったの!!」をくりかえした。

次週、再びプレールームにはいると、S子ちゃんは、二十五分間をつかって、かすかにかすかに進み、部屋の真中に立った。そして遊具だなと真正面に向かい合って遊具を眺めた。そこに二十分立っていた。「S子ちゃんの好きなおもちゃ、みつかったのね」 S子ちゃんの背中から小さい声でいうと、S子ちゃんはふり向いてうなずいた。「そう、みつかったのね」とくり返すと、S子ちゃんは、つかつかと遊具だなの前へ進み、むく犬の玩具の所へ手をのばした。あと五センチぐらいの所で手をとめて、じっと犬を見つめていた。第二回目はここで終わった。

第三回目に来談した時、母親は「S子が、とてもおもしろいことをしていただいているそうで……。家にかえってから、いろいろなおもちゃの話をいたします。勝手なことをいたしておりますでしょう」とあいさつした。

その日、S子ちゃんは、プレールームへ走り込んでいった。いきなり遊具だなの前へいって犬をとりだした。「これで遊ぶの」というなり、リモートコントロールのスイッチをおして犬を動かした。「S子ちゃん、犬くんと遊ぶのね」 S子ちゃんは「うん」といって、犬をへやのあちこちに連れ歩いた。親子の犬は、S子ちゃんに動かされ、ワンワンないた。母犬と子犬はS子ちゃんの足のところで止まった。

S子ちゃんは犬をすみにおくと、いきなりビニール刀をとりだしてきた。引き返してもう一つのビニール刀をもって私の所へ来た。「えーい!!」、何回も打ち込んで来た。「えーい!!」とS子ちゃんの打ちこみに合わせて声をあげると、S子ちゃんも、小さい声だが、三、四回に一度は「えーい」といって打ち

込んでくる。そのうちに、私のビニール刀はつなぎ合わせだったために折れておちた。

「あはゝゝゝ」――「あーはゝゝゝ」とS子ちゃんは、大きな大きな声で、からだを折りまげて笑った。笑いはなかなか、とまらなかった。私は床にすわっていた。

「あー、おもしろかった!! また、やろうよ、え――いっ!!」と構えたビニール刀は、勢いよく私の頭の上にふり下りて来た。

「あー、助けて!!」

「え――いっ!! え――いっ!!」何回も振りおろして来た。「よ――しっ!!」と立ち上がると、「え――いっ!! やっつけるぞ――!!」と勢いをまして来た。「強いんだから、えーいっ、おまえの刀は、弱いじゃないか、え――いっ!!」何回も打ちこまれた、再び私のビニール刀は折り曲げられて落ちた。

前よりも大声で笑った。

「あー、おかしい、せんせい、ばかだねー、すぐ負けちゃって。S子、つよいでしょ、本当はもっとつよいんだから、ねえ、またやる? またやっつけてあげる」

一息にしゃべったS子ちゃんの顔は、汗と笑いで別人にみえた。

「強いのねえー、どうして私は負けたのかしら。S子ちゃんより強いと思っていたのに、どうしてかしら、おかしいなあ」ひとりごとのようにいうと、S子ちゃんは、かけ寄って来て、「ほら、ここのところがちゃんとしていないでしょ。このビニール刀、長くついでずるいことするからよ。ばかねえ、もっとこう、ちゃんとつなげばいいのに、ほら」

「あ、そうするといいのね」

「そうよ、よく見てちょうだい!!」よくしゃべった。声は次第に、しっかりとした句調で音量を増した。

この回からS子ちゃんはおしゃべりS子ちゃんになった。S子ちゃんは、よく笑うようになった。

二週後、園の先生が「見ちがえるように、元気に明るくなってきました」と伝えてこられた。

S子ちゃんにとって、プレールームも、友だちも、自分が自由に振舞ってもおそろしくない対象になった。S子ちゃんが、じっとしていることを、とがめずに、ありのままに認めていくことを大切にしたことが、S子ちゃんの中で大きな力になった。受容ということは、子どもにとって、子どもの息のしかた、生きかたのテンポにあわせて、評価も、わくづけることもなく、うけ入れていくことであろう。幼児にとって、とかく、わくづ

けに制限される生活環境が、見のがされやすいことから、一考を要してみたいと考える。

4　すばらしい人間としての幼児をみつけよう

子どもたちの遊んでいる姿をじっと見つめたことのある人なら、誰でも感じることのできるものであるが、幼児の声、幼児のひとみには、不思議な美しさがある。

そこには純粋なものが脈うっている。

いちょうの大樹の下で、まい落ちる葉が風にながされ、薄絹の舞うような動きをみせるとき、数名の子どもがその葉を追いかけて、声をあげている。右に左に、風のうごくままに走り、追う。

まったく、一幅の絵である。

ここには、自然と子どもが溶け合い、子ども一人一人が生き生きと喜びあっている。どの子どもにも、何のひけ目も、ためらいもなく、自分自身になりきっている。○○の子どもでなく、「みっちゃん」であり「たけちゃん」であり「ゆうちゃん」であり「ジョージ」である。

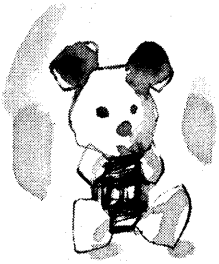
その一人一人が、一人一人で充分に行動している時、おとなは、その子に対して、「あのちえおくれが……」とか、「あの言語障害児が」とか、「あの自閉症が」というだろうか。思わず「かずくん、おもしろそうね」とか「よっちゃん、元気だね」と声をかけて近づいている。そこには、○○症とか異常は存在しないと見えているからだ。

もし、多くのおとなが、子どもの現実の症状としての異常や欠陥や障害にとらわれずに、子どもをみることができたら、その子どものもっている障害や欠陥状況は、一つの現象であって、子どもの人格そのものでないことが、鮮明に印象づけられ、理解できるであろう。

幼稚園で、恵まれた環境と人に取りかこまれて教育をうけるとき、この幼児の一人一人の人格を大切にしながら、毎日の扱いが配慮されたなら、どんなにか創造性の豊かな、才能の可能性の高い子どもたちが、育っていくだろう。子どもにとって、暖かく、やさしい気持、たくましく、はげしい気力、倒れてもおきあがる体力は、こうした中で、一番よく伸びていくのではないだろうか。

（所沢市教育相談室）

私の体験した
アメリカの幼児教育



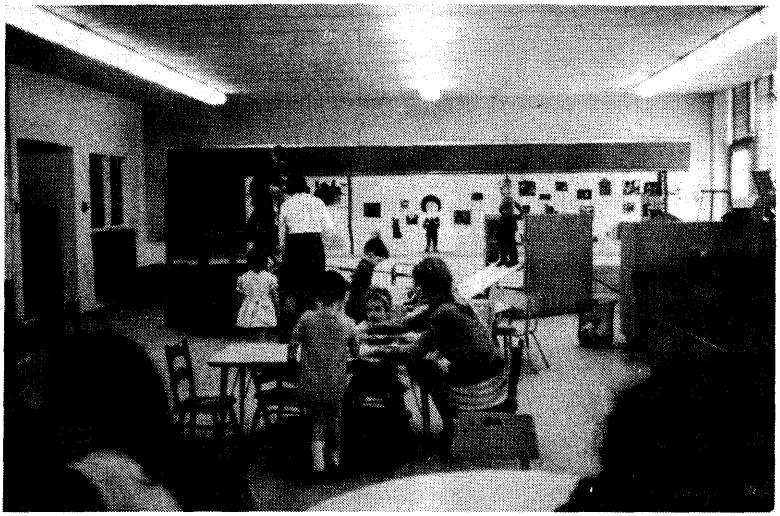
江波諄子

幼児教育の研究のために、二年間アメリカ、ペンシルヴァニア州立大学へ留学する機会を得ました私の、学校での勉学と、幼稚園での実際の経験の中から、一般的な内容紹介と、特に印象を強くうけた問題について少しお話してみたいと思います。

①大学附属ナースリースクール（幼稚園）

ペンシルヴァニア州立大学附属ナースリースクールは人間発達学部（家政学部に相当するもの）の中にあり、その中の児童発達・家族関係学科によって運営が行なわれています。この幼稚園は、学生が幼稚園教諭になるための実習の場であり、大学の研究の場であり、と同時にこの幼稚園へ通ってくる子どもの健全な教育の場という三つの大きな目的があります。コンクリートの建物の中の一階にある広い大きな明るい三つのへやに、午前と午後の部に分けて、あわせて五つのグループが編成されています。その内訳は二歳児一グループ、三歳児一グループ、四歳児二グループ、それに三歳四歳混合のランチグループひとつです。二歳児グループは週二日だけくる実験的なグループですが、他のグループは月曜日から金曜日まで毎日通ってきます。

ランチグループというのは昼食が出るグループということ



いろいろなコーナーのあるへや

なのですが、実際は低所得層からの子どもで通園料（十週間で六十ドル）無料、昼食無料支給のグループです。一グループの保育時間はふつう二時間半、人員構成は子ども二十名（男女半分ずつ）に対し主任の先生一人（修士以上の資格をもつ）、助手一人（大学院の学生）、学生五、六人でなっています。先生はふつう女性ですが、実習にくる学生の中には男子が必ず一人か二人いるというのはたのもしく思えます。ここにくる学生たちは実習のために必要な最低知識をコースで勉強してあり、同時にとっているコースでさらに実際の問題に触れる経験をします。指導方針はいわゆる従来の幼稚園のやり方をとっており、そのもととなっている考え方もキャサリン・リード(Katherine Read)の「幼稚園」(The Nursery School)やルイーゼ・ラングフォード (Louise Langford) の「幼少の指導」(Guidance of the young child) などの書物に基づいています。

②へやと遊びの内容

へやの中は次のような場が目的にそってつくられています。

a、おもに芸術的な活動につかわれるテーブル

b、指先をつかう活動につかわれるテーブル

c、科学的なものの観察につかわれるテーブル

アートテーブル

d、鏡や衣装まであるままごとコーナー
e、ブロックコーナー
f、ピアノ、その他の楽器、レコードのあるミュージックコーナー
g、低いたなに本がならべてある読書コーナー

です。

その他、へやの揚示板は大切な働きをします。その時々の季節やプロジェクト（計画）に従って学生たちによって興味深くかざられます。

それでは各々のコーナーではどんな活動がどんな材料をつかって展開されているのでしょう。

まずアート（芸術）テーブルは、子どもの毎日の生活にとってなくてはならないものです。その中でも、イーゼルペイント、フィンガーペイント、粘土、プレイドウ（ねり粉）などは子どもたちに人気があり、毎日、あるいは何日かおきにくり返し準備されます。その他、クレヨンやコンストラクションペーパー（色のついた画用紙）、ハサミは、たなに常備しておきますが、子どもたちはコラージュといって、コンストラクションペーパーの上に、切り紙、毛糸の切れはし、わた、雑誌の絵の切りぬきなどをのりではりつける作業もよく楽しみます。イモをつかった版画や、毛糸を絵の具の中にひたして

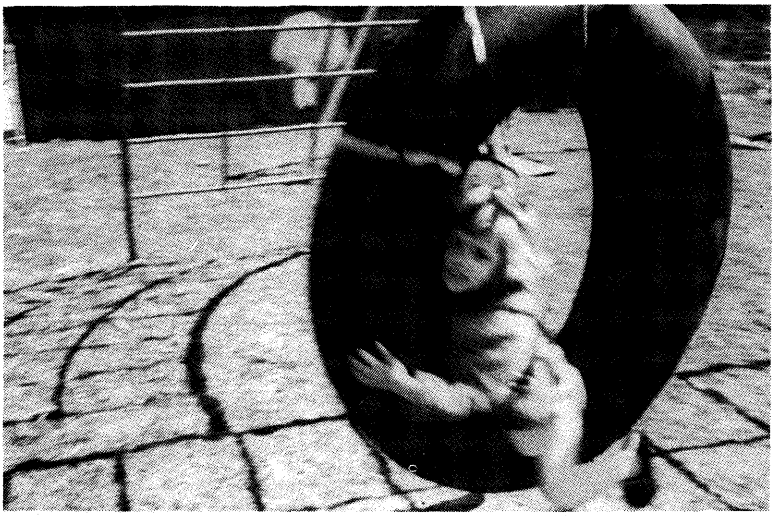
毛布にすわって

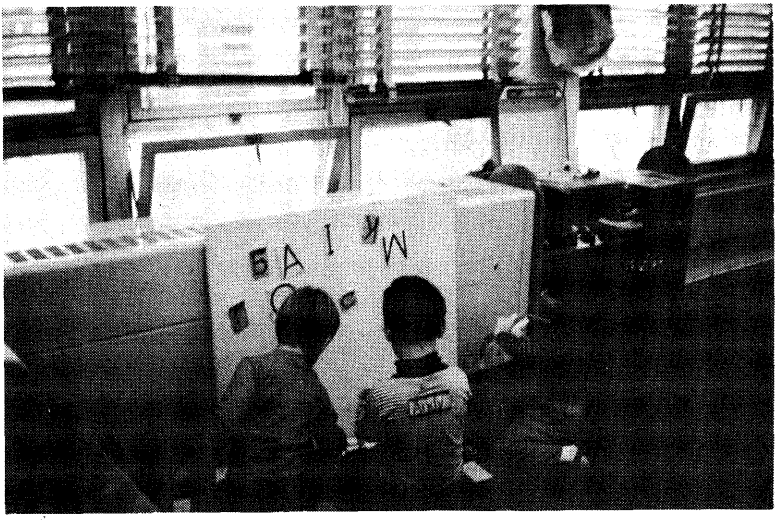
描く絵、歯ぶラシをつかった絵、ぬらしたペーパータオルの上にカラーチョークでかく絵なども時々なされ、これらの活動は、事前に先生や学生たちが自分たちのアイデアや本を参考にして準備します。

手先をつかう活動では、ビーズ（穴のあいた玉に太い糸を通す）、ペグボード（小さい穴のあいた板に細い棒をさして立てる）、スナップボタン（洋服のボタンやスナップがフェルト地についていて、はめたり、はずして遊ぶ）等、既製の材料が多くつかわれます。

サイエンステーブルには、ことりの巣やハチの巣、石、貝、木の葉、植物、魚などが一定の期間置かれ、子どもたちに観察の機会を与えます。ままごとコーナーは日本のそれと何ら変わりありませんが、教師たちは自己のイメージをとらえるのにと、全身うつしの鏡や、おとなが使ってちいさくなった洋服やシャツ、ネクタイ、帽子、くつ、それに子ども用につくられたフェルトのシャツやひだの多いロングスカートなど、たなやハンガーにかけて置いておきます。子どもたちはきかざって得意になってへや中を歩きまわります。

積木コーナーも日本のものと何ら変わりありませんが、敷物の敷いてある音楽コーナーや、お話の時間に床の上に敷かれる毛布は楽しいふんいきをつくり出します。先生あるいは中





おもちゃのいろいろ

心となる学生と数人の子どもが一グループをつくり、同じ毛布の上にすわって本を読んだりお話をしたり、また時には全員が大きな敷物の上にすわり輪をつくり、フィンガープレイや歌を歌ったり、お話をします。

幼稚園で人気があり、常に使われているおもちゃのいくつかをあげてみましょう。

木製の人形家具は子どもたちの楽しい夢をかもし出してくれる貴重なおもちゃです。またパンチングバッグは、たて、よこ、（50×80）センチくらいの布製の袋にやわらかいものをつめた袋で、ひもで天井や高い所からつるし、ボクシングのように打って遊ぶものです。攻撃的な行動が多くあらわれた子どもは、先生が意図的にこの遊びへとさそいます。

さて、アメリカの子どもたちは十時になるとみんなジュースとクラッカーを食べていると想像しますと奇妙な現象に思えますが、事実そうなのです。実験の結果から、朝早くから来た子どもはこの時間ごろになると身体的疲労から攻撃的な行動が多くなるといわれ、栄養も考えて、フルーツジュースと各種のクラッカーを出します。時には母親からのさし入れでクッキーなども出されたり、学生が計画して、アイスクリームやプディング、クッキー、スープなどを子どもたちと一緒につくって食べることもあります。食物を使った活動はその過程でいろいろなことを学べるので貴重な体験と考えています。

この大学のナースリースクールのトイレはへやの延長の一角にあり、男女用とも何の仕切りもないオープントイレです。こどもたちのからだの大きさを考慮して大・中・小と三種類の便器が並んでいます。

③教師になるための訓練

主任の教師になる人は修士以上の資格と、かなりの経験が必要とされますので、ふつうは三十代後半の先生が多いようです。子どもの指導と、学生の指導という立場にたって、時には大学側からの研究の世話もしなくてはなりません。ですからかなり柔軟な人格が要求されます。その下の大学院の学生である助手は、根本的には主任の先生の考えのもとに彼女の仕事にあらゆる面で協力します。実習にくる学生たちはキャサリン・リード(Katherine Read)の「幼稚園」(The Nursery School) を通読しておかなければなりません。ことに大切な部分は抜き書きされて印刷物として渡されます。それまで、教育の場において子どもに接した経験のほとんどない学生たちは、最初は野生の馬のように思わしくない行動や言葉を使ったりしますが、何学期か実習をしますと、必要欠くべから

動かない先生

ざる条件を次第に修得してゆきます。その中でことに大切だと考えられている条件をいくつかあげてみましょう。

まず、学生たちは否定的なもののいい方から肯定的ないい方への訓練をうけてゆきます。「アンドリュー、車を机の上にあげてはいけません」というかわりに、「車は床の上を走るものだわね」といい、「シャベルをふりまわしてはダメ」というかわりに、「シャベルは土を掘るものでしょう」といういい方を学んでゆきます。もともとこういういい方をする理由は、行動治療理論の中で、言葉に出してとりあげた行動は、再認識され強まるという考え方からくるもので、簡単にいえば、「いけません」ということによって、子どもはいけない行動を意識し、興味をもってより繰り返すようになると考えるからなのです。このように肯定的ないい方で子どもと話すことは非常に大切なことだと考えています。

次に、学生は静かに低い落ちついた声で、ゆっくり、はっきりと子どもに話しかける術を学びます。先生は興奮して大きな声を出したりすることは禁物です。いつも微笑を忘れないで、子どもと顔がむき合うよう、背を低くしておだやかに対話することを学びます。そして主任の先生は静かに子どもの動きを観察し、不必要に動く必要はないと考えます。子どもの名前をできるだけ早く覚え、日常の生活場面で一人一人

名前を呼んであげることも非常に大切です。子どもとの会話の中ではユーモアをおり込んで、親しみをかわすようにします。子どもがしゃべろうとしている時にはできるだけよく聞いてあげ、不完全な文章を補ったり、訂正したりしてあげます。また、つとめて質問をしてことばでの表現の機会をできるだけ多く与えます。

子どもに注意をする時は、必ずその理由をいい、なぜ注意されているのかが、子どもにわかるようにします。その場合、子どもに受け入れ態度ができていなくて、依然と攻撃的な態度でしたら、遊びの仲間からはずし、静かな所へつれてゆき、先生と一対一でゆっくり話します。そして、もしまだ子どもが感情的にたかぶっていたら、先生は子どもをしばらく一人にしておき、「お話できるようになったら知らせてちょうだい」といい、子どもが落ちつくのを待ちます。このようにおとなは子どもに自分自身をよく知らしめすために、行動の選択決定権を与え、それによって責任をとらせます。わけのわからない罪の意識で子どもを悩ませるよりも、ある限界内での選択権を与え、その中で自己を尊重し、責任感のある子どもに育てようとしています。

たとえば、ブランコの数より、それに乗りたい子どもの数の方が多い時には、乗っている子どもには二十回こいだら代わりましょうと約束します。前もって約束は守りましょうとよく確めあい、必ず守るようにします。また、番を待っている子どもには、その場で待つか、あるいは砂場で遊んでいれば、あいた時知らせてあげましょうといいます。子どもはどちらか好きな方をとり、しかし実際は多くの子どもは「では知らせて」といい、他の遊びへ行きます。その時、約束したおとなは、子どもが別の遊びに熱中していても、必ずあいたら一度声をかけ知らせます。そしてその後のブランコの乗り手をきめるのです。このように子どもとの約束ごとは非常に大切で、実行できないようなことは絶対約束しないように心がけます。集団の遊びの中で、子どもはどうしても順番を待つということを学ばなければなりません。これはとても効果のある大切な規則で、子どもにとってはルールを学ぶと同時に、自己の存在を自覚するという意味でも役に立ちます。その他に、先生は子どもたちの間で比較や競争心をおこさせるような言動はさけなければなりませんし、すべての子どもに対等につき合うよう行動します。子どもの行動を強化するという意味で、子どもが望ましい行動をした時は、その場ですぐほめるようにします。そのために、先生はそれが自発的なものであれ、指示された行動であれ、子どもの行動をよく観察していなければなりません。賞賛をその場ですぐするとい

うことは、この場合致命的です。

リードが彼女の本の中でいっているように、子どもにモデルを与えないということは、非常に厳格に守っています。それは一言でいえば、子どもの創造性を破壊してしまうからということなのですが、粘土、絵書きなど可塑的な素材をつかった活動ではことに大切です。実習に初めて来た若い学生にはこのことは少しむずかしいのです。学生は子どもと一緒に活動を楽しむよう要求されますが、そこでおとなの技術や考え方で物をつくって先にお手本にしてしまうことは禁物なのです。そうしますと、必ず子どもは同じもの、あるいは似たようなものをつくりますし、その結果を見ておとなのものと比べて嘆くかもしれません。もっとむずかしいのは何だかわからないものを子どもがつくっている場合です。「それなあに？茶わんみたいね」などと聞くのは子どもにとってあまり望ましくないのです。なぜなら、子どもは何も考えないで、粘土の感触を楽しんでいたのかも知れませんし（このこと自体が幼稚園での大きな目的でもあります）、あるいは他のものを意図していたのかもしれません。子どもがわけのわからないことをしているときも、「それなあに？」式の質問より、「その遊びはあなたたちの特別のゲームなのでしょう」「ルールを教えて」等と尋ねると、何でもなかった、たわむれが何か活気を帯びた遊びへと展開してゆくのです。たえず肯定的でユーモラスな中に、お互いにはっきりと言葉で対話してゆくというアメリカ人の特性は、もちろんこうして幼稚園の中にも見られるのです。

④中で遊ぶこども

子どもの側から遊びの内容を見てみますと、必ずしも理想的とはいえないのです。時代の流れで商品としてのおもちゃがあふれ、その中には、あって非常に便利なものもあれば、かえってつくられない方がよかったようなおもちゃも出てくるのです。商品としてのおもちゃは色がつき、はなやかで、詳しくて便利ですが、使いみちが少ないのです。木で柔らかく彫られたおもちゃの家具（無色）は子どもが床の上に並べていろいろなへやを何回つくってもあきないものですが、印刷された紙の上の町に四角の木の建物（着色）だけを並べるのには、子どもは最初しか興味を示しません。その中でパズル（木製の板に絵がかいてあり、それが何枚かの部分からなり、とりはずしができ、組み合わせて完成する）は伝統のあるもので、ずい分長い間この園の子どもたちに親しまれていますが、それも一度組み合せの方法を知ってしまうと、あまり興味のないものになってしまいます。けれどある時期のい

たのしい十時

く人かの子どもはこのパズルに非常に熱心になることもあります。

生活の商品化にともない物品が氾濫し、その結果、物がなくては遊べないという子どもがつくられてゆくのではないかという危険性はどうしても出てきます。現代のおとなの生活と同じように、子どもは遊びを作り出すのでなく、与えられたものの中から選ぶという現象がすでにここにもみられるのですから。

⑤アメリカ幼児教育界の言葉への関心と今後の動向

これまでは私が教える機会を得ましたナースリースクールの全般的な紹介をしましたが、ここではその中からひとつ、言葉への関心ということをテーマにして、アメリカ幼児教育界の大きな流れの中で少し考えてみたいと思います。

人々はなぜそんなに言語発達に関心があるのでしょう。それにはこの国の文化的社会的背景を考えなくてはなりません。コーケイジャン（白系ヨーロッパ人）の他にアメリカには文化のるつぼの名にふさわしく、ニグロ、イタリア人、スペイン系ラテンアメリカ人、プエルトリコ人、中国人、インド人、その他の東洋人など多くの民族が、いわゆるマイナー（少数グループ）と呼ばれて住んでいます。英語が国語としてのこ

の国に住む人にとって言葉の障害は非常に深刻な問題です。研究によりますと、このように言葉の障害をもつ子どもは学校での成績も低いということがわかっています。マイナーの人たちばかりでなく、両親がもともと英語を話す民族であっても、教育があまりなかったり、それにともない、経済的、社会的に貧しいと、子どもの学業に影響してくるというのです。最近ではセンシティビティ（感受性）などといって言葉以外のコミニュニケーションへの興味もおこっておりますが依然と言葉にそのほとんどをたよろうとする国民性は根深いものです。人々は執拗なまでに自分の意を言葉で表現し、他人にもそれを求めます。さて幼稚園ではまさにそれが始まりつつあるのです。つまり言葉中心のコミュニケーションの社会に育ったおとなは、子どもにまた同じことを要求し、教えてゆきます。子どもは小さい時から、できるだけ自分の意を言葉で表現するよう求められます。泣いたり、黙っていたのでは相手にされません。おとなは、あるいは相手はいわなくても分かってくれるだろうという甘えが許されないようです。自己を表現しなくてわかってもらえなかったということは自己の責任であるのです。ともすれば、後になって自分のことさえすればよいという意にもなりかねないこの責任感もまた、幼児のうちから強く要求されます。おとなたちは一日も早く子どもがおとなのように言動できるよう奨励してゆきます。こうした中で子どもも四、五歳になりますと、私たち日本人のおとなが顔まけするほどのことをいうようになります。たとえば「あなたのきょう着ているお洋服はとてもすばらしいわね。私、気に入ったわ」とか、「○○さんはお料理がとてもじょうずね。このスープすごくおいしいわ」などと、実際にはそれほどでもなさそうなのにいいます。

こうした日常生活での会話のあり方に加えて、幼児教育者が言葉にさらに関心をもつようになりましたのは、一九五〇年代にハント(J. Mcv. Hunt)によってアメリカ教育界にみなおされたピアジェ（Piaget）の解く認知発達の理論も影響しているようです。それ以来、幼児教育者たちは知能の教育可能性ということに興味をむけ、その中でも言葉の発達は大きな部分を占めています。一九六五年から始まったヘッド・スタート・プログラムは乏しい環境に育った子どもたちの学業がおとるのは、彼らが学ぶための刺激がなかったからだという考えに基づき、その目標のひとつを認知発達や言語発達に特別の注意を向けて、子どもの精神過程や機能を改善するとしています。さらに一九六九年の秋から始まった教育テレビ番組「セサミ・ストリート」は今や子どもたちの間で人気を博していますが、その目的もまた、子どもの知的発達のた

めに、できるだけの刺激を与えようとするものです。

このように、いずれをとりましても幼少の子どもの知的発達のためには環境の与える刺激の重要性を強く主張しています。認知発達イコール言語発達、と幼稚園でのつめこみ式教育を解くバライターやイングルマン（Bereiter,Engelmann）を代表とする極端な動きは別としましても、多かれ少なかれ、保育の場面でこうした配慮はいろいろな形でなされています。幼児の言語発達のためにつくられた機械を例にとりますと、それには画面があり、ボタンを押して発音しますと、正しければ次の画面に移ります。しかし、正しくなければ、そのまま何度も正しくなるまで発音をくり返す仕組みになっています。あるいは本を使ったものでは、字を覚える前の子どもでもできるように、先生と一緒に絵を見ながら、耳から正しい発音、似かよった音をもつ語彙を捜して訓練します。ある幼稚園ではタイプライターを使って、アルファベットのかけない子どもでも、字を打って読む能力を養っています。以上のような特殊の方法を使わなくても、教師たちは自分たちのアイデアでできるだけ、子どもが正しい、多くの言葉に触れるよう努力しています。

「リッキーは、青いシャツにしまのズボンをはいているわね」「シャロンはオレンヂのコートがとてもおにあいよ。それに赤いブーツもすてきね」「マーク、流しの横の台にあるハンマーを、もって来てくださる？」「積木はテーブルの隣のたなの中に入れましょうね」実際、私たちの日常生活での会話はよく気をつけて聞いていますと、意外に不完全な文章だったり、代名詞などを多く使っているものですが、ここでは教師や母親は、上、下、わき、そば、前、後などの何種類もの英語相当語を正しく使い、助詞や動詞の変化をくり返し教えてゆきます。

幼稚園では、さらに身近な題材を使って語彙をふやし、子どもの認識を高めるよう努力します。頭から手足の先までのからだの各部分の名称を入れた歌や遊びは、子どもたちが自分のからだをつかえるので非常に有効です。色紙をさまざまな形に切り抜いて色や形や大きさを弁別させながら楽しむコラージ、また同じ意図ですでに商品として売られているパズルなどは、単に感覚器官のみにより学ぶのでなく、常に言語をともなって遊ばれるものです。数についての概念を意図したものには、一から十までの数字を指をつかいながら歌う歌や、大きなこよみをへやに作って、サンクスギヴィングデー（感謝祭）やクリスマスまでの日をみんなそろって毎日数えてみることもやってみます。

非常に簡単でよくみられる活動のひとつに、雑誌の切り抜

きを使ったグループ時間があります。教師はあらかじめ種々の雑誌から意図した写真（たとえば、家族構成を念頭にしたものでしたら、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、赤ちゃんなどの写真、季節をテーマにしたものでしたら四季の写真、地域社会をテーマにしたものでしたら、おまわりさん、消防夫さん、食料品屋のおじさん、郵便屋さん、牛乳屋さん、農夫などの写真、その他各種の車や道具などの写真）を切り抜き、その日のテーマのもとでグループの時間にみんな敷物の上に先生をかこんで集まり、写真を見ながら知っているだけのことをいい合うのです。

最近では、ピアジェの理論に基づいた幼児用のおもちゃまで市販されるようになりました。それらは単に語彙をふやす以上に分類、数、空間、時間、保有などの概念の発達に役立つように意図されています。このようにして、言語を中心とした幼児の認知発達には、ことに若い幼児教育者、研究者にその関心が高く、今後まだまだ続きそうです。また、それとはかかわりなく、この国の文化型にあった言語教育は、教育にたずさわる人々によってさまざまな形で続けられてゆくものと思います。

私がおりました、ペンシルヴァニア州立大学附属ナースリースクールでは、昨年からその名をナースリースクールから幼児教育プログラムと変えました。従来の方式から、現在ある理論に基づいた幼児教育をやってみようという実験的な試みが、若い研究者たちによって始められました。これに対し、年配の思慮深い学者たちは、幼児の真の教育のことや、学生たちの教員養成の立場を考えて、強く反対しましたが、ついに履行されてしまったのです。具体案はピアジェの理論に基づいたグループ、「新しい幼稚園」という名で知的発達に重点をおく、グレン・ニムニック（Gren Nimnicht）のグループ、それに行動治療理論に基づくグループの三つが出されました。その中では訓練された教師はおらず、大学院学生と学部学生のみが子どもとともにいるだけです。子どもの両親たちの反対をよそに実行されたこの計画は、アメリカ国内では決して新しい試みではなく、すでにあちらこちらでなされています。けれど、子どもはあくまで実験の材料でなく、生きた一個の人間であること、そして、その一刻、一刻がきめのこまかい訓練された立派な指導者によって教育されねばならないことを考えて、これらの試みがやがてまた、従来のどちらにもかたよらない全人的な教育をする場にもどってくるだろうし、そうなってほしいと願う学者や教師たちも少なからずいるということもまた事実なのです。

保育者養成の諸問題

立川　多恵子

はじめに（保育者とは）

庭先の木の芽がもえ、枯草の中に若みどりの草の芽がのび出した。大へん美しい。私はこのごろ、四季折々の草木の美しさに見入る。しばらく前までは、花の咲いた状態にのみ心奪われ、「花見に参りましょう」と人々に語りかけた。もちろん色彩のある花の美しさも格別である。しかし、新緑の美しさも、夏草のみどりも、秋の紅葉も、落葉の風情も、冬木立の寂しさにも、それぞれの美を感じる。「年のせいかな」と考えることもあるが、そういってしまいたくない。保育を考えているうちに、生あるものの美しさ、尊さを知ることができるようになったのかもしれない。

「人間」を考える時、とかく、世間の人々はよい仕事をした、名誉ある地位についた。よく勉強ができた、展覧会に入賞した等の時、植物に花が咲いたごとく、注目し賞賛を惜しまない。せい一杯生きている人間の、その時々のそれなりの美しさに気づかない。その美をいとおしむようにはぐくみ、次の美を育てていく、こんな仕事が保育につながるのではないかと考える。花の美しさだけを期待して、早く花を咲かせることのみ考えて、あせってはいけない。子どもの無限の可能性（美）に向かって、瞬間、瞬間の子どもの姿を大切に受けとめて、適切な形で手をさしのべてあげる。これが保育者の仕事である。子どもの自然に発達する力を信頼しながら、あたたかい援助を与えたり、子どもと溶け合って、子どもと共に成長の喜びを味わうことができるのが保育者である。

一　保育者をいかに育てるか

序章では、私の考えている保育者像を書いてみた。これは保

育観につながるものである。

こうした保育観を実践する保育者をどう育てていったらよいか、これが本論文の課題である。私の学校では、毎年二～三倍の応募者がある。その中から五十人前後の学生を入学させている。第一次試験は筆記であるが、第二次試験に面接を行なっている。面接試験で不合格になることはまずない。しかし応募者の中には、「保育者にうってつけ」と思われる者と、「保育者は無理ではないか」と考えられる者とがある。私の考える保育者像に自然につながる応募者に出会うとうれしくなる。ここで問題になるのは、保育の適任者とはいかなる人間だろうか。なんらかの方法で、保育の適任者を選出することが可能ならば、方法を考えてみたらどうかということである。

現在のところ、短時間の面接場面での把握なので、面接の勘にたよることになるのだが、性格面からみると、たとえば、明朗であり、誠実であり、あたたかみのある人間ということになろう。これは応募者の生い立ちの中で育てられたものである。かりに保育の適任者を求めることが科学的に考えられるとしたら、適性検査を作り、実施してみるということになるだろうが、保育の仕事の微妙さを考える時、自信がもてない。結局、保育者養成も人間教育の一環と考えて、応募した学生を一人でも多く受け入れて、保育界で子どもと共に育ってもらいたいと願うことになる。

入学当初、適性ではないかもしれないと考えられる学生でも、その学生なりの味を生かしながら、二年後には、保育者として、子どもとの生活の中で、責任をもってもらうことになる。こう考えていくと保育者養成校の任務は重い。

保育者養成の場合、大切に考えなければならないのは、人格の陶冶と、子ども観の確立と、それにともなう保育観の育成であると考える。一般に保育者養成を考える場合、保育技術の修得とか、職業観の確立が上げられるが、保育技術の修得は、育成された保育観を生かす方法として、子どもの気持を子どもの発達に即して、しっかり受けとめてやったり、また、保育者の気持を充分に子どもに伝えるための手段として、初めて必要になってくるものと考える。

職業観の確立については、学生が子ども観を獲得する過程において、また、保育観をきずき上げていく過程において把握される職業意識がもっとも望ましいものと考えられる。

職業観の確立ということだけをとり出して、学生に指導したのでは、子どもの幸せを保証する保育者を育成することにならない。

二　幼児観、保育観作りの実践例

近ごろの保育者養成の風潮として、かつての技術尊重から理論重視に変わったことは、保育は、まず子ども観の確立につながるものとして大へん喜ばしい。しかし、この考え方をもう一歩進めてみると、子どもの生き生きとした姿の前に、その理論もうすれるのを痛感する。「子どもの中からの発見は大きい」私の担当している児童心理や、幼児教育の講義からとらえられる子どもは、ややもすると、概念的であり、単なる知識としてのみ定着する危険性がある。そこで本校では、理論のみを先に打ち出して、頭でっかちの形で、子どもを見るということを極力さけるため、一年の前期には「幼児教育調査」という科目を設けて、幼児の観察を義務化している。

週一回、合計五回の観察は、観察幼稚園での保育を大切にしたいという気持から、前の三回を観察のみにとどめて、あとの二回だけ子どものあそびの中に参加させている。観察対象は、学生の興味を重んじ、指定していない。したがって、学生は幼稚園集団の中での子どもの生態をとらえて、自由な形で子どもを感じとる機会をもつわけである。観察を通して、子どもの表情や行動から、子どもの中に発見できた事柄を教室にもち帰り、学生一人一人が感じたものを大切にしながら、一回の観察終了ごとにグループ討議の機会を作っている。教師は各グループを巡回し、討議内容の幾つかを講義で取り上げ、次の観察のための問題を提起したり、具体的な観察例を理論に当てはめる。

学生は、第一回目の観察では、性差やグループの大きさ等、子どもの姿を現象面でとらえることが多いが、第二回目の観察になると、おとなとの価値観の相違に着眼することができるようになる。保育者志望の学生にとって、外側から子どもを観察することは、忍耐のいる仕事である。

第二回目の観察後の討議において、「子どもとあそびたい」とか、「子どもの中にはいって、子どもをもっと知りたい」とかいった要求が出始め、第三回目になると、この要求が、沸騰点に達する。本校のように最初から保育者になることを希望して入学した学生としては、当然の現象であり、大切にしたい感情である。子どものあそびの中にはいっての観察の機会を得ると、観察後の話し合いは盛り上がり、子どもとのかかわり方が問題として取り上げられる傾向が強くなる。

後期にはいると、あらかじめ教師の指示した対象児の追跡観察を行なっている。これは観察を依頼する幼稚園の保育にも、学生の観察事項がプラスになっていくことをねらって、観察幼稚園の保育者に対象を選出してもらっているためである。した

がって、学生は許された五回の観察期間を通して、毎週一回観察園に観察レポートを提出する義務をもつ。この仕事は相当努力を要することであるが、比較的順調に約束が果たされ、幼稚園の保育のためにも役立ててもらっている。後期の観察は二人一組を原則としている。二人で共通の対象を見て、その子どもの行動の意味を多角的に考えてゆくには便利な方法である。二回に一度ぐらいの割にグループ討議の機会を設定し、グループの力で、それぞれの対象児の見方を深める。

五回の観察の終了後は、「私は対象児をこんなふうに理解している」というテーマでレポートにまとめられ、担任との話し合いの機会をもつ、話し合いを通して、学生たちは、担任と共通の見方のできたことを喜んだり、見方の相違を経験し、子どもの行動に対する新たな見方を発見する。保育者の中には、今まで、気づかなかった子どもの長所を取り上げて、卒直に喜んでくれる者もある。付属幼稚園をもたない養成機関の場合、協力幼稚園側の迷惑は一通りでないし、学校としても気がねは大きいが、学生の研究を通じて、保育者も保育研究の機会が得られるとしたらうれしい。

二年次になると、教育実習という名目で「子どもを理解し、子どもの発達を助けるために、保育者はどうあったらよいかという目的をもって、週一回、十回にわたって、教育実習園で観察参加が実施される。学生たちは、毎日保育日誌に、感じたことを大切にした記録を書きつづける。学生のある日の実習日誌に次のようなことが記録されている。「今日はとっても良い天気だ。五月晴れである。ほし組の教室へはいって行くとみーちゃんがすぐ私の所へとんで来て『先生いいこと教えてあげる。あのね、みーちゃん、今日、半袖シャツなの』と耳うちした。私は『そう半袖なの、それでみーちゃん寒くないの』というと、『寒くないわ』とうれしそうに答えた。半袖になったことが子どもにとっては、それほど大きなできごとなのだろうか」今まで寒い冬を過ごし、春になった子どもの喜びを新鮮にとらえている。

また、子どもの受けとめ方について、実習の中で、新たな発見を記録したのが、次の文章である。「私にベッタリの子が何人かいる。この子どもたちについて考えてみた。Aちゃんは、私の服を持ったりして、からだにベッタリついている。Bちゃんは直接からだに接触することは少ないが、『一緒にあそびたい』といつも要求してくる。同じような傾向のある子どもでも、よく見るといろいろだ。一括して考えてはいけない」一人一人の子どもの段階を大切にした言葉である。

またこの観察、参加の経験の中で、幼稚園における雑務を手伝いながら、雑務といわれるものの中に保育のあることを発見している。室内を整理しながら、「あっ、あの子はこうだったのか」を思い浮かべることも楽しく、雑務が子どもと教師、教師と教師、教師と幼稚園を親しく結ぶ仕事であると理解するきっかけを作っている。

観察、参加の計画は、教室で学んだ理論を実践の中で、もう一度ほどいてみることになる。また実践の場での子どもの姿を教室へもち込んで、子どもの新鮮なさまを語り、教師も学生も共に、保育観をねり上げてゆく。

四月から週一回の観察、参加であるため、子どもの発達の流れのおよそを把握できる長所をもっているが、前日の子どもの動きを連続してとらえることができないという欠点もある。

後期にはいると、三週間の集中実習を経験する。この時は、どの学生も、子どもの中に抵抗なくはいりこむことができ、落ちついた形の実習をつづけることができる。それでも、二日目の保育日誌に「私はどうしても、力の強い子（口の達者な子ども）とばかり触れ合うことになってしまう。いろいろな子どもと接したいが、私はあまり『子ども間の関係』の中へズケズケはいってゆくのも好ましいものではないと思うので、なるべく、『子どもたちの間の関係』はそのまま見ていることにしている」と書いている。なお、子どもの中で手さぐりをしている感じはまぬがれないが、保育者の姿勢の一つとして、大切なものをとらえている。集中実習の終わるころの実習日誌には、「近ごろ、子どもたちと親しくなってきたせいか、だんだん子どもたちに対して、いろいろなことを命令するような感じになってしまっている。からだを動かすより、口を先に動かす傾向も見えてきた。恐ろしいことである」子どもと共に生活するむずかしさを素直に訴えた言葉である。

保育実習後の学生たちは、実践の経験を得て急に成長する。実践がいかに思考を深めていくかをいまさらのように感じる。実習終了後は、共通に保育に関する小論等を読んで、まず各自で考え、クラス討議を通して、既成の理論をもう一度考え、新しい方向づけを試みる。学生に子ども観や、保育観を書いてもらったことがあったが、よいものが少なくなかった。

どうも子どもを視覚や聴覚ばかりでなく、皮膚感覚でとらえて、からだの中に育ててゆくことを目的に保育者を養成している場合、抽象理論を求めることは無意味だったのかもしれない。抽象的に子ども観や、保育観をみごとに書き流すことができる学生が、保育者として、よく育ったとはいえないとも考えられ

る。充分意を現わせない文の中に、大切なものがひそんでいるように考える。それでも、学生の文章の中の大切な見方を二、三拾ってみる。「子どもは、まことに純粋である。清くて、無垢なものという解釈でなくて、『生きている』ことに全精力を使っている存在である。その子どもの中に、人間として『生きている』と感じることのできる保育者になりたい」とか、「とにかく、子どもを教えるのではなく、子どもと共にあそび、学んでいける状態、しかもおとなとしての自覚と責任をもち、子どもにとって、たよりになる人間になりたい」と書かれている。不消化な文章も見られるが、肝心なものをつかんでいる。

おわりに（卒業生のために）

三月になると、免許状を手にしたたくさんの保育者が巣立つ。わが国では四年制の大学で養成される保育者の数は少ない。現在のところ短大や養成所の二年制度の学校で養成される保育者の数が圧倒的に多い。もちろん四年間の養成期間があるにこしたことはない。しかし、二年制の養成機関において育つ保育者には別の味わいがある。二年間というのは短い期間である。したがって、二年制の学校で保育者を養成する場合には、何を大切にするかということを考えなければならない。私が大切にしたいのは、子ども観と、それにともなう保育観の育成ということである。保育技術も基礎になるようなものは押えておくにこしたことはない。

若い保育者にも、望ましい子ども観さえ充分に育っていれば、実践の場において、子どもの中にはいった時、一人一人の子どもに与えられる配慮が、たとえ未熟であったとしても、子どもの成長への影響はプラスにこそなれ、マイナスではありえない。もちろん、試行錯誤が多いので、本人は大量のエネルギーを消費することが予想されるが、そのことが保育者としての成長につながることになるとしたら、それでよいのではないかと考える。しかし、ここで、心得ておかなければならないことは、免許状を授与された段階で一人前の保育者になったと考えてはならないことである。どの教育者の場合も同じことがいえるが、特に二年制の学校で養成された保育者の場合は、子どもたちの中にはいって、学校時代と形の異なった研究が始まるのである。そこに、二年制の学校で育った保育者の味が出てくるのである。研究といっても、もちろん、学者の研究ではない。保育者が実践の中で得た問題を中心に思考を深めてゆくことである。したがって、方法論のみに終始する研究でも意味がない。

若い保育者は、先輩に指導をあおぐ機会が多い。いろいろ相

談することが大切であると考える。問題は、先輩からしめされた方法をそのまま、うのみにすることにある。子どもは、一人として同じ子どもはいないはずである。と同じように、同じ条件の場面はほとんどない。先輩の意見を充分にきいて、一度自分の中で消化して、あらためて、自分の保育の中に生かす努力が必要である。このことは、いろいろな研究会においてもいえる。提示された具体的な保育の方法について、なぜこんな方法がとられたのか、その原理的なものをさぐり合うことが大切になろう。こうした地味な保育者の努力の中で、幼児教育は進展してゆくものと確信する。

昨年七月からつづいた保育者養成問題シリーズは今回で一応終わる。六人の筆者が、それぞれの立場でユニークな小論を書いた。しかし、底に流れるものは、すべて同じものである。「保育者養成とは、人間の魂の教育である」今回のシリーズ誕生の意味を大切にして、今後とも保育者養成に関する研究に地味な努力を重ねたい。

（埼玉県立教員養成所）

幼児の教育　第七十一巻　第三号

三月号　©　定価一〇〇円

昭和四十七年二月二十五日印刷
昭和四十七年三月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

★キンダー砂場セット（新型）

カラフルで丈夫なプラスチックの特長を生かし、数々の新しいアイデアを盛り込んだ砂場用品の決定版です。砂型は1個から2つの型がとれます。バケツは注ぎ口のついた大きくて丈夫なものです。フルイも本格的な金属網ですから目づまりがおこりません。シャベルは握りやすく掘りやすいデザインです。

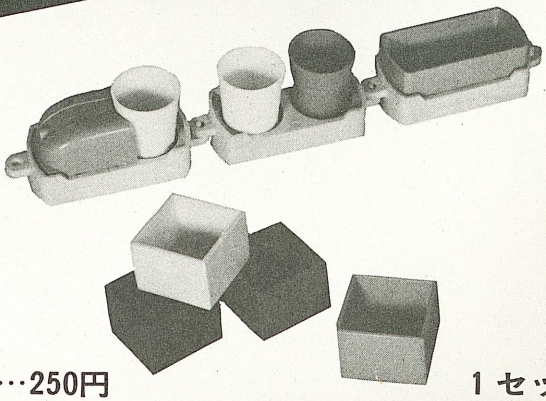
1セット内容

- ●砂型（4種類）（スチロール）
  黄・緑……20コ
- ●フルイ（スチロール）
  ピンク……10コ
- ●シャベル（スチロール）
  赤・青……40コ
- ●バケツ（ポリプロピレン）
  赤……4コ
- ●整理用カゴ（ポリエチレン）
  黄……2コ

1セット……6,000円

カラフルな最新型誕生 砂場用品

★砂型トレイン



砂場で遊びやすい底の平らな車体に、砂場セットと同じ砂型を3個と大きな箱型がのせてあります。楽しいスマートなデザインで、美しく丈夫なスチロール樹脂製です。

スチロール樹脂製
1セット……1,100円

★ます

赤・黄・青・緑の美しいプラスチック製です。丈夫で耐水性もあり、永く使用できます。

プラスチック製
4コセット……250円

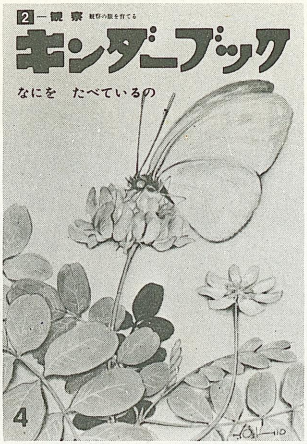
4月号から キンダーブックが3種類になります

お子さまの成長にあわせてお選びください

情操をゆたかにし、創造力をのばす

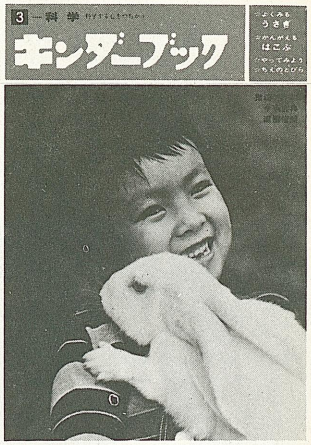
1ー情操　キンダーブック
A4判・20頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価100円

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする



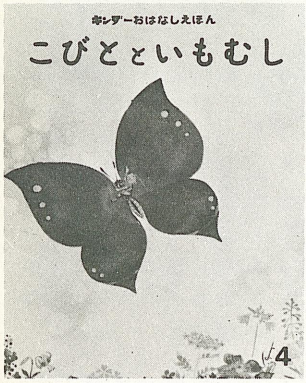
2ー観察　キンダーブック
A4判・36頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価130円

科学する心をそだて、自然に親しませる

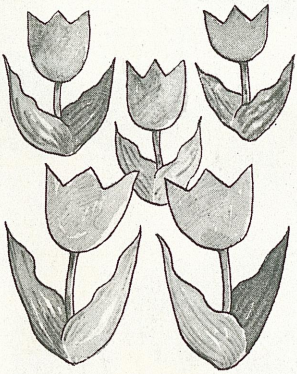


3ー科学　キンダーブック
A4判・36頁・多色刷・付録つばめのおうち・紙工作・4月号特別付録
団体購読価130円

幼児の心を育てる



キンダーおはなしえほん
L判・36頁・多色刷・付録 つばめのおうち・4月号2大特別付録
団体購読価130円



株式会社
フレーベル館

園児をもつ母親の専門誌

ホームキンダー
L判・100頁・多色刷・4月号特別付録　団体購読価100円